
アナザー：ロミオとシンデレラ

目白皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザー：ロミオとシンデレラ

【Nコード】

N5419V

【作者名】

目白皐月

【あらすじ】

拙作『ロミオとシンデレラ』のレン視点バージョンです。他に、ミクなどの視点が入ります。ピアプロに掲載しているものと重複投稿になります。

注意書き

この作品は、doriko様の「ロミオとシンデレラ」を題材に、黒刃愛様が作成したPVにインスピレーションを受けて、私が書いた小説『ロミオとシンデレラ』の、レン視点バージョンです。レン以外に、ミクなどの視点が入ります。

もともとは頭の中を整理するために書いていたのですが、割とまとまって一つの作品としても読めると判断したため、掲載することにしました。

基本的に話の中身は『ロミオとシンデレラ』と同じです。

こちらを先に読んでも問題はないと思いますが、個人的には『ロミオとシンデレラ』を読んでから、こちらを読んだ方がいいかなとは思いますが。

大丈夫？

その日、俺は前から楽しみにしていた舞台を見るために、劇場に行っていた。ミュージカル、『RENT』の来日公演。映画を見てからというものの、実際の舞台を見てみたくてたまらなかつた。

初めて見た『RENT』は、想像以上に素晴らしかった。特に「オーバー・ザ・ムーン」の前の曲では、音が空から降ってくるんじゃないかと思った。ラーソンは空から落ちてくる雪を、音で表しかつたんだろう。きつとそうだ。

上演が終了した後も興奮が冷めないの、あれこれ考えつつロビ―を歩く。なんでラーソンはあれ一作で死んでしまったんだ。もっと長生きしてくれていたら、どんな作品が生まれていただろう。ああでも、あのタイミングで亡くなったから伝説となった部分も大きいし、伝説になったからこそこうして俺が見るチャンスもあったわけで、でも、やっぱりもっとたくさん作品を……。

そんなことを考えていると、肩に誰かがぶつかった。……人が多い。ちよつと立ち止まって、俺はそんなことを考える。やっぱりそろそろ外に出るか、そう思った時。

俺の視線のちよつと先で、大きな鞆を持った男が俺ぐらいの年の女の子を追い越そうとした。はずみで、鞆が女の子の背に勢いよく当たり、女の子はそのまま倒れこんでしまう。俺が声をあげる間もなく、男はさつさと行ってしまい、後には倒れた女の子だけが残されていた。……気づけよ、ほんくら。

女の子は倒れたまま起き上がれずにいる。……倒れるところを見てしまった以上、放っておくわけにも行かないか。俺は近寄って、女の子に声をかけた。

「大丈夫？」

女の子が振り向いてこつちを見た。あれ……この子、知ってる。同じクラスの巡音リンさんだ。こんなところで会うとは思わなかつ

ただ。

「……あれ、巡音さん？ どうしたの？」

俺は膝をついて彼女の隣にしゃがんだ。向こうはびっくりした表情でこっちを見ている。

「ごめんなさい。誰だったかしら？」

「……えーと。確かにまとも話をしたことはないけど、クラスメイトなんだから、憶えててくれよ。それはちょっとないんじゃないか？」

「同じクラスの鏡音レンだよ」

巡音さんは俺を見て、考え込む表情になった。

「ああ、ごめんなさい。制服じゃないと感じが違うんでわからなかったの」

そういうもんか？ 俺だって巡音さんの私服姿見たの初めてだけど、すぐわかったけどなあ。……そういうことをあれこれ言っても仕方がないか。

「ふーん……で、どうしたの？」

「転んだ拍子に足をくじいたみたい」

「立てそう？」

「……多分」

巡音さんはそう答えたけれど、表情を見る限りじやかなり辛そうだ。一人で立つのは無理だろう。俺は彼女に手を差し出した。

「俺につかまりなよ」

巡音さんは俺の手を取ろうとして、ためらった。なんで遠慮してるんだろう？

「遠慮しなくていいって。足、相当痛いんでしょ？」

俺がそう言くと、巡音さんはちよつと考えて、それから俺の手を取った。俺は巡音さんの片腕をつかみ、自分の肩に回して、それから彼女を引き上げて立たせた。

巡音さんはまだ遠慮しているのか、あまり俺の方に体重をかけようとしなない。別に巡音さん支えたぐらいで、潰れるほどヤワじゃない

いんだけどな。

「じゃ、俺に体重かけて」

「え……？」

どうも意志の疎通が上手くいってない感じがする。このままというわけにもいかないの、俺は巡音さんを支えながら歩いて、ロビーの椅子のところまで行くと、そこに座らせた。さてと、こういう時は冷やすといいんだけど……。

「ちょっと待ってて」

そう言うと、俺は巡音さんの返事は聞かずに歩き出した。ロビーの先に、ジュースとか売ってる売店があったはずだ。

売店に行くと、俺は「足を痛めた女の子がいるので、氷をわけてもらえませんか？」と頼んでみた。すると、「あら、それは大変ねえ」という言葉と共に、あっさり氷をビニール袋に詰めて渡してくれた。……言ってみるもんだ。

氷の入ったビニール袋を持って、俺は巡音さんのところに戻った。「ほら、これで足冷やしなよ」

巡音さんはビニール袋を受け取って、足首に当てた。見るからにほっとした表情になる。俺もちょっと安心した。

「ありがと。どうしたの、これ？」

「その売店でもらってきた。足痛めて歩けない子がいるって言うて。……巡音さん、これからどうする？」

さすがに彼女の自宅まで支えていくつてのは無理があるし、俺にはこれ以上の治療とかはしてやれない。休日だから病院とかも閉まってるだろうし……。そんなことを考えていると、巡音さんがはっとした表情になった。

「迎えが来る予定になっているの。だから、そこまで行ければいいんだけど」

そういや、巡音さんの父親って半端なく大きな会社の社長なんだっけ。学校にも、運転手つきの車なんかで送り迎えしてもらってたはずだ。初めて見た時は驚いたもんだ。そんなものが存在してる

なんて思わなかったしな。多分、その車が迎えに来てるんだろ。

「迎え？ そう言えば、巡音さんのところって確かすごかったよね」
巡音さんは困った表情でうつむいてしまった。……「ありゃ、しまった。こういうことを指摘してはいけなかったらしい。」

「じゃ、そこまで送ってくよ」

「え……いいわよ。鏡音君に悪いわ」

別に遠慮しなくてもいいんだけどなあ。俺が言い出したんだし。

「けど、その足じゃ歩くのも辛いんじゃない？ 俺なら平気だから気にしないでいいよ」

巡音さんはしばらく悩んでいたが、結局のところ承諾した。

「本当にいいの？」

「くだい。男に二言はない」

俺はもう一度巡音さんを支えて、立ち上がらせた。と、座席の上
に何かが残っている。

「巡音さん、プログラム忘れてる」

巡音さんがプログラムを拾う。表紙には『ロミオとジュリエット』
と書かれている。……「シェイクスピアか。」

俺は巡音を支えて、出口へ向かった。劇場の外に出ると、そんな
に離れていないところに、巡音さんが言っていた車が止まっている。
車に近づくと、運転手らしき人が血相を変えて駆け寄ってきた。

「リンお嬢様っ！ どうなさったんですか！」

「……転んで足を捻ったの。歩くのが辛くて困っていたら、助けて
くれたのよ」

「そうですか。お嬢様がお世話になりました」

運転手さんが頭を下げる。……「えーと、なんか反応に困るな。」

「困った時はお互い様ですから。気にしないでいいですよ」

我ながら言っていることが変だ。とりあえず、巡音さんを車の後部
座席に乗せる。さてと、これでもう大丈夫だよな。

「それじゃあ、また明日学校で」

そう言って、俺は巡音さんと別れた。

舞台が終わった後、CDショップやら本屋やらに寄ったので、家に帰った時はちよつと遅くなっていた。

「ただいま」

帰宅すると、姉貴はちょうど台所で夕飯を作っているところだった。

「あ、レン、お帰り。舞台はどうだった？」

「言葉にできないぐらいすごかった。姉貴、晩飯は何？」

「今日は餃子よ。まだちよつと時間かかるから、もう少し待って」

「じゃ、俺はその間に風呂洗って沸かしとくよ」

俺の家はいわゆる母子家庭な上に、母親が去年から海外赴任しているの、現在この家で生活しているのは俺と姉貴の二人だけだ。

といつても、姉貴は社会人だし、俺も高校生だから、生活にそんなに不都合はない。面倒ではあるけれど。家事も大体折半して二人でやっている。例えば晩飯作りなら、月、水、金が俺。火、木、土が姉貴。日曜は週ごとに交代。食器洗いは作らなかつた方の担当。掃除は各自の部屋以外は、一階が姉貴、二階が俺。洗濯は姉貴、風呂洗うのとゴミを出すのは俺。こんな具合だ。もちろん、個々の都合もあるから、いつもこうつてわけじゃないけど。

風呂を洗って沸かした後、部屋に戻って買ってきた雑誌を広げていると、下から姉貴が「ご飯できたわよ」と声をかけてきた。階段を下りて下の部屋へ行く。

二人で晩飯を食べていると、姉貴が、不意にこんなことを言ってきた。

「そう言えば、今日スーパーで珍しい人に会ったわよ」

「誰？」

「えつと……ほら……あの子よあの子」

「それじゃわかんないよ」

「名前が出てこないのよ。あんたが前につきあつてた子」

「ユイか。……よく憶えてたね」

別れてもう一年以上になるんだよな。それにしても、姉貴はよくユイのことがわかったな。世の中には服装が変わっただけで、誰だかわからなくなる人もいるのに。

「ああ、そうそう、ユイちゃんだった。向こうが声かけてきたのよ。レン君は元気ですかって」

「へえ……」

俺は反応に困って、適当な返事をする。一年近く前に別れた相手のことなんか、今更持ち出されてもなあ。

「あんた、冷たいわねえ」

姉貴はそう言っただけをしかめた。

「……どういう反応をすりゃいいんだよ」

「普通他に何か訊くことあるんじゃない？　元気そうだった？　とか」

「……じゃ、元気そうだった？」

「とってつけたように訊かれてもねえ……」

おい。俺がむっとする、姉貴は笑い出した。

「冗談よ冗談。元気そうだったわ」

「そりゃ良かったね」

俺がそう言うと、姉貴はちょっと考え込むような表情になった。

「……復縁とか期待しないんだ」

「向こうが俺を振ったんだぜ」

ユイは中学の時の同級生で、三年の文化祭の時に告白されてつきあうことになった。確か、ずっと好きだったとか言われて。けど、あいにくと二人が進学したのは別々の高校だった。それでもしばらくはつきあっていたが、結局、ユイは自分の高校で別に好きな人ができたとかで、俺たちは別れることになった。

「『やっぱりあなたが一番だったと気づいたの』とか、言ってほしかったりしないの？」

「何それ」

そう答えると、姉貴はちょっと呆れた表情になった。

「……そういやあんた、別れた時あんまりシヨックそうじゃなかったわよね」

「別れ話切り出される前から、そうなるんじゃないかって気はしてた。少し前から、一緒にいてもあんまり楽しそうじゃなかったし」
「気持ちのなくなったユイを引き止めたいとは思えなかったし。だから別れ話にもすぐ同意したんだっけ。」

「……そういうあっさりした態度、向こうは不満だったかもよ」

「そう言われても」

どうしろっていうのさ。

「ま、確かに。こればかりはどうしようもないしねえ」

そう言っつて、何故か姉貴はため息をついた。……なんだよ。と思っつたが、姉貴と喧嘩してもしかたないので、俺はこれ以上あれこれ口を挟むのはやめた。

次の日、俺が登校すると、巡音さんはもう来ていて、自分の席で本を読んでいた。左足には包帯が巻かれている。昨日あんなことがあったせいか、ちょっと気になるな。俺は彼女に声をかけてみることにした。

「おはよう、巡音さん」

巡音さんは顔を上げてこっちを見た。……少し驚いているみたいだ。昨日のことがあるまで、普段ろくに話もしたことがなかったんだから、しょうがないかもしれない。

「あ、おはよう、鏡音君」

「足の具合はどう？」

巡音さんは、視線を自分の左足に落とした。

「捻挫で全治一ヶ月って言われたわ」

「じゃ、当分大変だね」

「骨を折ったわけじゃないわ。大丈夫よ」

巡音さんは淡々とそう言ったけど、それでも結構辛いんじゃないだろうか。それに色々不便だろうし。

「まあ、そりゃそうだけど……」

「昨日はありがとう」

「気にしなくていいよ。ところで、何読んでるの？」

巡音さんは、本の背表紙をこちらに向けた。『椿姫』と書いてある。あ、これ、中学の時に読んだ。……父親の方と間違えて借りるというバカをやらかしたせいで。最後まで読んだけど、正直言おうと大して面白くなかった。何故かつまらなければ止めるという選択肢が、当時の俺にはなかったんだよな。

「『椿姫』か」

「ええ」

女の子はやっぱりこいうのが好きなのかな。昨日見てたのも『ロミオとジュリエット』だったし。うちの姉貴みたいに、B級映画を笑いながら見るのは珍しい部類に入るんだろう。そんなことを考えていると、後ろから明るい声がかかった。

「リンちゃん、おはようっ！」

「あ、ミクちゃん」

同じクラスの初音ミクさんだ。確か彼女も大きい会社の社長令嬢だとかで、同じように車で送り迎えしてもらってる。初音さんの従弟のクオは俺の一年の時から友達で、色々とは話は聞いているが、本人と喋ったことはあんまりない。……そっぴや、初音さんと巡音さんって仲良いんだっけ。ここにいたら邪魔かな。

「じゃ、俺はこれで」

巡音さんにそう言って、俺は自分の席へと戻った。

大丈夫？（後書き）

色々考えたのですが、結局こちら（レン視点バージョン）も平行して掲載していくことにしました。

作中で言及されているレンの元カノはオリジナルキャラです。もしかしたら同じ名前の亜種とかがいるかもしれないですが、全く関係ありません（すいません、亜種には詳しくなくて……）ので、ご了承をお願いします。

ミクの興奮

その日の朝、登校したわたしの目に入ったのは、信じられないような光景だった。何かあって？ リンちゃんが、同じクラスの鏡音君と話をしていたのっ！ これが驚かずにいられますか！

……と言うと、大抵の人は「そのどこが信じられないわけ？ 同じクラスなんだから話ぐらいするでしょ？」って思うかもしれない。けれど、リンちゃんに関してはそれはありえないのだ。何しろリンちゃんは、がちがちにガードが固い。リンちゃんの育った家庭を考えると仕方がないんだけど、とにかくもう固い。相手が男の子だとそれはもつと顕著で。わたしはリンちゃんと幼稚園の頃からのつきあいだけど、小学校高学年になった頃から、リンちゃんは自分からは、全く男の子と話さなくなってしまった。じゃあ、話しかけられた時はどうかって？ 大抵は口ごもっちゃってまともに返事できない。わたしの家には現在、わたしと同じ年の従弟のクオ。これはあだ名で、本名はミクオ が同居していて、リンちゃんが遊びに来た時にクオと顔をあわせることもあるんだけど、やっぱり話せずにいる。

わたしがリンちゃんにおはようと声をかけると、鏡音君は自分の席に戻って行ってしまった。

「ねえねえリンちゃんっ！ 今話してたの鏡音君でしょ？」

「そうだけど」

リンちゃんはちょっとわたしの勢いに困ってるみたい。でもこれだけは譲らないもんね。絶対に鏡音君と話してた経緯を聞きださなくちゃ。

「いつ仲良くなったの？」

わたしがそう尋ねると、リンちゃんが昨日起きたことを話してくれた。リンちゃんが劇場 リンちゃんの趣味は観劇だ で転んで足をくじいてしまい、困っているところに鏡音君が通りがかって

助けてくれたのだそうだ。さっき話していたのも、足のことを心配してしてくれたらしい。

「そんなすごいことがあったんだ……」

それはさておき、これってなかなかいい状況じゃない？ そういう「困った状況」だったから、リンちゃんのガードが一時的に外れたんだわ。思ってもみないチャンスかも。

「別にすごくないわ。ただの捻挫よ」

「怪我の話じゃないんだけどな……というか、鏡音君は意外といい人だったのね」

鏡音君はクオの友達だけど、クオは家に友達連れてこないから

わたしもお父さんもお母さんも、遠慮しないで連れて来いって言うてるんだけどね　わたしは鏡音君のことはよく知らないの。

「ミクちゃんは、鏡音君のことよく知ってるの？」

「わたしはそうでもないけど、クオが仲いいのよ。一年の時同じクラスだったし、部活も一緒だから」

クオは、似合わないことに演劇部に入っている。今年の学祭では結構目立つ役を舞台で楽しそうにやっていた。……何て役名だったかしら。人間じゃなかったことは憶えてるんだけど。「人間を滅ぼせ！」って舞台上で叫んでたっけ。

もつと話していたかったけれど、始業のベルが鳴ってしまったので、わたしは席に戻った。先生が入ってきて、あれこれと話を始める。でも、わたしの頭の中は、思いついた計画のことでもいいだった。

リンちゃんのガードが外れるなんて、数年に一度あればいい方だし、しばらくは継続しているだろうし、これはチャンスっ！　この機会に二人をくつつけるのよっ！　それがわたしの使命だわっ！　でも、わたし一人じゃ難しいわね。クオにも手伝ってもらわなくちゃ。

昼休みに、わたしはクオにメールを打った。相談したいことがある

るので、学校が終わったらいつもの喫茶店に来てくれって。え？
家で話せばいいじゃないかって？ だって、できるだけ早くこの話
したかったんだもの。家に帰るまでなんて待てないわよ。

学校が終わると、わたしは鞆をつかみ、喫茶店へと向かった。
クオはまだ来ていない。でも、もうじき来るだろう。わたしは奥
の席に座った。

しばらく待つと、クオが入ってきた。

「あっ、クオ！」

手を振ると、クオはわたしに気づいてこっちにやってきた。向か
いの席に座って、メニューを見る。しばらくするとウェイトレスさ
んが注文を取りに来たので、クオはアイスコーヒー、わたしはアイ
スココアを注文した。このお店のココアは、クリームがたっぷり入
っていて美味しいの。

「で、なんだ？ 相談したいことって」

「あ、うん。あのさあクオ、鏡音君と仲いいよね？」

「なんだよいきなり」

クオはちよつとむっとしてるみたい。どうしたんだろう。とはい
え、この目的のためには、クオの機嫌なんかに構ってられない。わ
たしは質問を続ける。

「調査よ調査。クオ、鏡音君って、今つきあっている人はいる？」

まずは彼女の有無を確認しないとね。お膳立てしといて実は彼女
がいました、じゃ、リンちゃんやんが傷ついちゃう。あ、でも、つきあ
ってる人がいたらどうしよう。さすがに別れさせるのはちよつと、
ね……… いませんように。

一方、クオはますますむっとしてるみたい。

「今はいないはずだけど。去年の今頃に彼女と別れたって聞いてか
ら、新しいのができたという話は聞いてないし」

前はいたけど、今はいないのね。なかなか悪くない話。クオの口
ぶりだと、深刻な失恋って雰囲気でもなさそうだし。今頃淋しさが
身にしみてるかも。

「じゃあ今フリーなんだ。ね、前の彼女と別れた理由って何？」

「なんでそんなこと訊くんだよ」

「だって知りたいんだもん。浮気性だったりすると困るし」

浮気症だとか、彼女に暴力振るうとか、金銭関係のトラブル抱えてるとか、そういう性質の悪い男をリンちゃんに近づけるわけにはいかないもんね。

クオは、不機嫌と困惑が入り混じったような表情で、わたしの質問に答えてくれた。

「なんか……相手の子に別に好きな人ができたらしい。学校が違うからつきあいの継続が難しかったんじゃないのか。詳しいことは聞いてないから俺も知らない」

割とオーソドックス、というかもすごく普通の理由ね……。まあでもそんなもんか。それに、下手に失恋の傷引きずられても困るわ。

「じゃ、浮気とか暴力とかじゃないのね。まあ、真面目そうだし大丈夫だと思ったけど。これならOKだわ」

リンちゃんの彼氏として。鏡音君は外見もいい方だし、成績も良いし、リンちゃんと並んでも見劣りしないわ。よし合格。

「何がだよ。おいミク、自分一人で納得してないで、俺にちゃんと説明しろ」

おっとっと。クオにもちゃんと話をしなくちゃね。これから協力してもらうんだから。この計画には、クオの協力が必要不可欠なんだし。

と、クオが不意に深刻な表情になった。どうしたのよ。

「なあ、ミク……。お前、もしかして、レンのことが好きなのか？」

は？ やだなあクオったら、どうしてそうなるのよ。思ってもみなかったことを訊かれたせいで、わたしは笑い出してしまった。ありえなくい。そりゃ、確かに鏡音君は見た目いいけど、わたしの好みとは外れている。

「え？ 嫌だ違うわよ」

あれ、クオ、怒るかと思っただらほつとした顔してる。どうしたんだらう。

「じゃあ何が『これならOK』なんだ」

あ、いけない。ちゃんと説明しないと。

「鏡音君とリンちゃんの仲を取り持つてもOKってこと」

わたしがそう言つと、クオは今度は啞然とした顔になった。何もそんなに驚かなくてもいいじゃない。

「どこからそういう話が出てくるんだ」

クオはわたしたちとはクラスが違うので、あの朝の風景は見ていない。というわけで、わたしは力を込めて説明することにする。

「今日ね、リンちゃんと鏡音君が話をしてたの。それを見てわたしはぴんと来たのよ」

「……何が」

クオ、どうしてそう興味なさそうな反応なの？ わたしにとつてこれは一大事なのよ！？

「あの二人は絶対お似合いだったって！」

こぶしを握つてわたしはそう断言した。でも、クオはしらけた表情をしている。……もう。

「なんでそこでお前が盛り上がるんだよ」

クオはそんなことを言ってきた。

「え、だって、高校生活勉強ばかりじゃ淋しいじゃない？ リンちゃんが彼氏を作るチャンスをものにしてあげるのが、親友の務めつてもものでしょ？」

ちよつと、クオつてばどうしてそこで呆れきつた表情するの？

全くもう、クオはリンちゃんの抱えてる事情知らないし、仕方がないのはわかつてるけど、ちよつと面白くないわ。こうでもしないと、リンちゃんは恋愛する前にあのお父さんに結婚させられてしまう。

「お前だつて彼氏いないじゃないかよ。他人の世話焼く前に、自分をどうにかしたらどうだ？」

しかも、しかもだ。クオつたら、こんなことを言い出したのだ。

「しょうがないじゃない！ わたしにつりあうようないい男がいないんだから！」

このわたしがつきあうんだから、わたしのことを世界で一番お姫様扱いしてくれる人じゃないと。これだけは譲れないわ。というかクオだつてわたしの好みは知ってるはずなのに、なんでこんなこと言うのよ？

クオはむすーとした表情のまま、アイスコーヒーを一口啜った。

「それにしても……お前それだけの理由で、レンに巡音さん押しつける気か」

……ちよつと、それ、どういう意味！？ 久々本気で怒ったわよ。クオだったら、リンちゃんのことをなんだと思ってるの！？

「クオ……それ、どういう意味？」

わたしは冷たい口調でそう言つて、クオを睨んだ。クオが椅子の上でじりつと後ずさる。さすがにわたしが本気で怒ってることがわかったみたい。

「ミ、ミク……そんな怖い顔するな」

悪いけど、返答次第によつちや許しちやおかないわ。

「『レンに巡音さん押しつける』って、どういうつもりで言ってるの？ リンちゃんはわたしの友達よ？ クオは、リンちゃんをそういうふうに通ってるの？」

わたしがクオを睨んでいると、クオはたじたじになりながら、こんなことを言い始めた。

「い、いやだからさ……レンの気持ちはどうなるんだよ？ 互いの気持ちは大事だろ。レンにせよ巡音さんにせよ、好みは逆かもしれないぞ」

賭けてもいいけど、クオ、もともとは違つこと考えてたでしょ。でもまあいいわ、勘弁してあげる。

「それは……まあそうだけど……」

クオは、見るからに安心した様子をしている。甘いわね。計画に

協力はしてもらおうよ？ さっきわたしを怒らせたんだから、これは当然の代償よね。

「でも、うまくいくかもしれないでしょ？」

わたしの勘は、あの二人はうまくいくと告げている。

「可能性がないとは言わないが……」

「じゃあやるわよ」

クオをさえぎり、わたしはぴしやりとそう言った。

「何を」

「二人の仲を取り持つの！」

クオ、できることなら協力したくなさそう。でも、逃がすもんですか。

「クオ、手伝ってくれるわよね？」

声にプレッシャーをにじませてそう言う。絶対に承諾してもらいますからね。

「……わかったよ。で、俺は何すりゃいいんだ。言っとくけど、レオンを巡音さんときあうよう説得するのは無理だぞ」

ふっふっふ、かかった。

「そんなこと頼まないわよ。あのね……」

わたしは早速、クオに作戦を説明し始めた。

ミクの興奮（後書き）

やっぱりハイテンションなミクは書いていて楽しい。

何故ならそれこそが恐怖だから

土曜日の夕方。俺が自分の部屋で課題を片付けていると、携帯が鳴った。かけてきたのは……クオカ。

「もしもし」

「よう」

「どうした？」

「ああ……えっと、お前、明日暇か？」

なんか歯切れ悪いな。いつもならもつと立て板に水みたいに話すのに。

「暇だよ。晩飯作らないといけないから、それまでだけど」

晩飯当番以外の予定は入ってない。遊びにでも行こうってのかな。

「そっか。だったら、明日、俺の家に来ない？」

「え？」

俺は思わず訊き返してしまった。こいつ、今、何て言った？

「だからさ、明日、暇なら俺んちに来ないかって言ったんだよ。映画のDVDでも見ようぜ」

変だな。クオの奴は両親が海外赴任中で、ぶっちゃけ、これが俺とクオがすぐ意気投合した理由の一つだったりする。現在は従姉の初音さんの家で生活している。そのせいか、クオは基本的に誰かを自宅に呼ばない。だから、一緒に映画のDVDを見ようとかゲームをしようなんて話の場合、クオの方が俺の家に来る。なんだ？

何があつた？

「映画？ だったら映画館行こうぜ。面白そうな新作が確か今日からだったぞ」

「……それもいいけど、やっぱり明日は俺んちにしようぜ」

やっぱりなんか変だぞ。俺が携帯を握ったまま考え込んでいると、クオはこんなことを言い出した。

「そうそう、レン。例の奴買ったんだぜ。お前が見たいって言うて

たゾンビ映画」

「『ブレインデッド』？」

そりゃ見たい。前から見たいと思いつつ機会が無かったんだよ。

「折角だから俺んちで見ようぜ。ホームシアターあるし」

へえ、初音さんそこにはホームシアターがあるのか。それでゾンビ映画見るのも楽しいかも。

「じゃ、そうするか」

なんか変だなと思いつつ、俺はクオの誘いに乗ることにした。

クオの家　　ってか、初音さんの家か　　に行くのは初めてだ。

住所を確認してついた先は、聞きしに勝る豪邸だった。ああ、これじゃあ……家に人呼ぶの、確かに嫌かも。

インターホンを押すと、クオが出てきた。っていうか、門から家までが広い。ここは本当に日本かと突っ込みたくなる。

「よう、来たな。入れよ」

「一応、挨拶とかした方がよくないか？」

「ああ、今日は伯父さんも伯母さんもいないんだ。いるのは俺とミクと、お手伝いさんとかだけ」

……だから呼んだのかな？　まあいいや。あれこれ突っ込むのはやめとこう。

「ホームシアターがあるのはこっちだ。ついてこいよ」

俺はクオの後について行った。クオが一つの部屋のドアを開けて中に入り、そこで立ち止まる。……あれ。

クオが開けた部屋には確かにホームシアターが設置されていた。さすが金持ちというか、部屋の壁一つがスクリーンになっている。周りの音響機器も高そうだ。スクリーンから離れたところにゆったりしたソファと背の低いテーブルが置いてあって……そこに女の子が二人いる。……初音さんと巡音さんだ。もしかして、かちあった？

「あれ、ミク。お前、なんでここにいるんだ」

「あ、クオ。今日はリンちゃんと映画を見ようと思って」
「ちよつと待て。今日は俺がホームシアター使う日だぞ」
「そんなの聞いてな〜い」

俺のしている前で、クオと初音さんはもめ始めた。巡音さんの方に視線をやると、ソファに座ったまま、困ったような表情で二人を見ている。

「何言ってるんだミク。俺、昨日ちゃんと話しただろ」
「聞いてないってば」

「お前、先週もホームシアター独占してただろ。今日は譲れよ」

「え〜、嫌〜。折角リンちゃん呼んだんだし」

「やかましい。こつちだつて都合があるんだよ」

……何やってんだこの二人は。と、その時、巡音さんがおずおずと口を開いた。

「ミクちゃん……。わたし、今日は帰ろうか？」

そうだよな、こんな状況見たら帰りたくもなるよな。

「ダメっ！ リンちゃんがクオに遠慮することないのっ！」

すかさず叫ぶ初音さん。……こういうキャラだったのか？ けど、二人の喧嘩を見ていると楽しくないぞ。それは巡音さんも同意見だろう。

「あ〜、じゃあ俺が帰る」

「レン、帰るんじゃないっ！ 俺をこの状況で一人にするなっ！」

今度はクオに止められてしまった。どうしろっていうんだよ。巡音さんを見ると、困ったような表情のまま、今度はこつちを見ている。どうしよう、と言いたげだ。それはこつちが訊きたい。

俺と巡音さんが内心で頭を抱えていると、初音さんが立ち上がった。

「……ちよつとクオと話をつけてくるから、リンちゃんはここで待ってて。帰っちゃダメだからね」

……なんだか怖いぞ。クオ、もしかしたらすごく苦労してたのか？
「レン、俺が戻ってくるまで勝手に帰るなよ」

そう言っつて、クオは初音さんと部屋を出て行った。なんだよ、そんなに一人になりたいくないのかよ。とはいえ、こう言われるとさすがに帰れない。

というわけで、俺は巡音さんと二人っきりで部屋に残されてしまった。巡音さんを見ると、相変わらず困った表情のまま、視線を宙にさまよわせている。えーと……。

「……いつも、あなの？」

俺は、とりあえず浮かんだ疑問を口にした。

「え、いつもっつて？」

言葉が足りなかった。

「クオと初音さん」

「大体あんな感じかな」

へえ。初音さんっつてクオと一緒にだとあなるのか。結構意外だ。

「大変だなクオも。あ、そっち座つてもいい？」

立ちっぱなしで待つてんのもあれだしな。巡音さんが頷いたので、俺はソファの少し離れた位置に座った。

「あの二人、どれぐらいで戻ってくると思う？」

数時間単位でもめられても困る。ま、さすがにそれはないか。

「さあ……わたしも、あんなに派手に揉めてるのは初めて見たし」

巡音さんは首を傾げた。見当もつかないらしい。

「クオの奴一体何やってんだか……。そっついや巡音さん、足の具合はどう？」

「まだ痛いけど大丈夫よ」

「巡音さんは、初音さんとは仲いいの？」

「ええ。幼稚園の頃からのつきあいだから」

「そりゃ長いね」

ここで話が途切れてしまった。えーと、何だか気まずいな。何か適当な話題、適当な話題……。

「巡音さんたちは、今日は何見る予定だったの？」

映画の話題なら無難だろう。

「え？」

「いやだからさ、映画。俺とクオはホラー見る予定だったんだけど、そっちは何を見る予定だったのかなって思って」

「聞いてないの。ミクちゃんは『楽しみにしてて』としか言わなかったし。でも、多分ラブコメじゃないかな」

クオとは真逆の趣味だなあ。女の子らしいっちゃ、らしいけど。……って、初音さんのこと話していると巡音さん、感じ違うな。

「初音さんはラブコメが好きなのか。クオはああいうの苦手みたいだけど」

「そうなの？」

「前そういう話をしてたよ。あれじゃ度々揉めてるだろうね。巡音さんは？」

軽い気持ちでそう訊いてみる。……なんでそこで固まるんだ？

俺、別に変なこと訊いてないよな？

「だから、ラブコメとかが好きなの？ それとも悲恋物の方がいい？」

具体的な質問の方が答えやすいかと思って、訊き方を変えてみる。

「え……」

やっぱり固まったまんまだ。そんな緊張するようなことか？ 俺、映画見る人間なら誰でも訊くようなこと訊いただけなのに。

「単純にどっちが好きなのかって話なんだけど。あ、どっちも好きなの？」

「……………」

「この前『ロミオとジュリエット』見てたし、『椿姫』読んだりしてたから、巡音さんって悲恋物が好きなのかって思ってたんだよね」

……何喋ってんだる俺。と、巡音さんがようやく口を開いた。

「あれは、たまたまそういう組み合わせになっただけで……」

えーと、そんな悲痛な表情をしないでくれますか。俺がいじめるみたいじゃん。……さっきみたいにした方が可愛いのに。

「……………巡音さん、俺何か悪いこと訊いた？」

気になったので更にこう訊いてみる。

「え？」

戸惑い半分、困ってます半分って表情で訊き返された。……どうなってるんだろ。

「あ……いや……」

俺も返事に困ってしまった。そして、二人とも無言になってしまったまま、時間だけが過ぎていく。……さすがに結構しんどいぞ。クオの奴何やってんだ。

どれだけ経過しただろうか。ようやく、ドアが開いた。

「ごめんね、二人とも。待たせちゃって」

初音さんとクオが戻って来た。助かった……。巡音さんの様子をつかがうと、向こうも明らかにほっとしている。

「ミクちゃん、お帰り」

初音さんは明るい。隣のクオは仏頂面だ。

「とりあえずクオとは話がついたから」

初音さんはそんなことを言った。どう話がついたんだろう。

「で、結論は？」

俺は初音さんに訊いてみた。

「うん。今日のところは四人で揃って映画を見ようって」

……へ？ どうしてそういう話になったんだ。思わず巡音さんの方を見ると、向こうもびっくりしている。そりゃそうだよな。って
いうか……。

「クオ、お前、それでいいの？」

恋愛映画嫌いだよ。

「しょうがねえだよ。レン、悪いが今日はつきあってくれ。俺、この状況で一人になりたくない」

別にホームシアターにこだわらなくても、今からでも俺の家に行くとか、選択肢はあるだよ。けど俺がそう言う前に、初音さんがソファにやってきた。

「というわけだから、詰めて詰めて」

初音さんが巡音さんを軽く押したので、巡音さんは俺の方に向かって席を詰めた。初音さんが巡音さんの反対側の隣に座る。クオはDVDのパッケージを開けて、プレイヤーの開閉スイッチを押した。「じゃんけんでわたしが負けたから、最初の映画はクオが選んだ奴だけど、リンちゃん、辛抱してね」

「ミク、お前、一々うるさいよ」

クオはえらく不機嫌だ。DVDをセットすると、リモコンを片手に戻ってきて、初音さんの空いている側の隣に座って、再生ボタンを押した。って、ちよつと待てよクオ。お前、この状況で『ブレインデッド』見る気が？ どう考えても女の子と一緒に見る映画じゃないだろ。画面が汚いって評判な上に、使った血糊の量でギネスブックに載ってる映画だぞ。

……もしかしたら初音さんたちもホラー好きとか？ あ、これ、『ブレインデッド』じゃないや。『ドーン・オブ・ザ・デッド』だ。さすがのクオも『ブレインデッド』と一緒に見る気はなかったらしい。……これもゾンビ映画だけど。

前に一度レンタルで見たことあるけど、やっぱりホームシアターだと迫力が違うな……なんてことを思いながら、冒頭の女の子ゾンビが襲ってくるシーンを見ていた時だった。突然、隣からすごい悲鳴があがった。

「いやああああっ!」

びっくりしてそつちを見る。初音さんが悲鳴をあげていた。あれれ。巡音さんも画面を見るどころじゃなく、初音さんを見ている。

こんな反応するってことは、初音さんってホラーが全くダメなタイプ？ クオ、お前、何考えてんだ。俺と巡音さんはどっちも啞然として、悲鳴をあげる初音さんを見ていた。

「クオのバカっ！ 変態っ!」

初音さんはいきなり立ち上がってクオに飛びかかると、その首を勢いよく絞め始めた。うわあ……。

「何考えてんのよっ! 信じられないわっ!」

「……………」
「あんなグロい映画見せるなんてっ！ クオの悪趣味悪趣味悪趣味っ！」

「……………」
「いや、こんなのまだ序の口で、この後もつとすごいシーンが……なんて言ってられる状況じゃないな。とりあえず、俺はリモコンを手にする、停止ボタンを押して画面を消した。消えたら落ち着くかなと思って。でも、初音さんは相変わらず叫びながらquoの首を絞め続けている。」

「ねえ、巡音さん」

「何？」

「初音さんって、ホラー苦手だったりする？」

「……………」
「……そう言えば、わたし時々ミクちゃんと映画見るのだけど、ホラーは一緒に見たことがないわ。わたし、ホラー映画って見たの、これが初めて」

「なんか今引つかかる台詞があったけど、今はquoを助けてやらな
いと。口から泡ふきかけてるし。俺は立ち上がると、初音さんの肩を軽く叩いた。」

「初音さん初音さん、それくらいで勘弁してあげて。quo、白目む
いてる」

「初音さんははっとした表情になり、quoの首を絞める手を離れた。
えーと……………」
「今、quoの頭がソファの腕木にぶつかって、なんだか鈍い音がしたような……………」。

「……………」
「……っというか、quo、動いてないぞ！？」

「きゃ〜っ、quo、しっかりしてっ！」

「初音さんはもう一度quoに飛びつくと、今度はquoを激しく揺さぶり始めた。その度にquoの頭がソファの腕木にぶつかって、鈍い音がする。……………」
「なんとというか、背筋が寒くなってきたぞ。」

「ねえ、ミクちゃん……………」
「そっとしておいてあげた方がいいんじゃないの？」

たまりかねたのか、巡音さんがおずおずと口を挟んだ。

「リンちゃんっ！ クオが起きないっ！ どうしようっ！」

初音さんはクオを放り出すと　また鈍い音がしたぞ　巡音さんに勢いよく抱きついた。巡音さんが初音さんの頭を撫でている。

……もしかして、ここの家これが日常茶飯事だったりするんだろうか。

「えっと……多分大丈夫よ」

巡音さんはそう言っているが、本当に大丈夫かこいつ？　俺はクオの傍らにしゃがみこむと、頬を軽く叩いてみた。

「お〜い、クオ。生きてるか？」

「う……」

クオは首をさすりながら起き上がった。さすがにちよつとほっとしたぞ。救急車を呼ぶような事態にならなくてよかった。

「ほら、ミクちゃん。ミクオ君は大丈夫だったから」

巡音さんが初音さんにそう言っている。

「悪いが……全然大丈夫じゃねえ……ミク……俺を殺す気が……」
それはそうかも。

「クオ、良かった！　生きてたのね！」

初音さんはそう叫んで、今度はクオに抱きついた。巡音さんはほつとした様子で、そんな二人を見ている。

「誰の……せいで……死にかけたと……」

「あーん、クオ！　ごめんなさいっ！　わたしがやりすぎたわ！」

これは一応いい光景と呼んでいいんだろうか。……俺にはわからない。

というか、映画は？　クオも息を吹き返したので、俺は訊いてみることにした。

「で、映画はどうする？」

「ホラーは嫌よっ！」

初音さんの即答。確かに、これじゃあ俺もホラーを見る気にはなれない。今のクオの臨死体験は、下手なホラーより怖かった。

「じゃあ、初音さんが見たい映画を見るといふことで。それでいい？」

巡音さんの方を見ると、頷いた。クオを見る。

「もうそれでいいよ……」

それが、クオの返事だった。諦め半分、疲れ半分という顔をしている。あんなことがあったんだから仕方ないか。

「じゃあわたしのお薦め映画を……」

初音さんが立ち上がって、プレイヤーにDVDをセットした。そして、映画上映会は再開したのだった。

昼食やら休憩やらを挟みながら、俺たちは結局映画を二本見た。

どっちも初音さんのお薦めのラブコメ映画。クオはずーっと仏頂面をしていたが、女の子二人は楽しそうだった。一本目はともかく、二本目の映画は音楽の使い方が面白かったな。

映画を二本見終わると、巡音さんは「門限があるから」と言っただけで帰って行った。初音さんも自分の部屋に引き上げてしまい、ホームシアタールームには俺とクオが残された。さて、と……。

「俺もそろそろ帰るけど、クオ、ちよつといいか？」

「なんだよ」

「今日見れなかったホラー映画、借してくれ」

結局『ブレインデッド』は見れなかった。

「ああ、別にいいぜ。今日は悪かったな。ミクと鉢合わせしちまったせいで、お前までラブコメ映画につきあわせちまって」

「やっぱりこいつ、なんか変だ。ちよつと確かめよう。俺がクオを正面から見つめると、クオはたじろいだ。」

「……なんだよ」

「訊きたいことがあるんだ。クオ、お前、俺に何か隠してないか？」

クオは、なんとというか、わかりやすいほどに派手にうるたえた。

「……な、何だよいきなり。そ、そんなことないだろ」

お前、嘘つくの向いてないよ。演劇部なのになあ。……思わず派手なため息が出る。

「お前さあ、その態度だけで『はい、俺は何か隠してます』ってバシてるよ?」

クオがむっとした表情になる。だが、俺はクオが口を開く前に、先を続けた。

「そもそも、昨日の時点で変だと思ったんだよ。お前、あんまり自分の家　ってか、初音さんの家が　に人呼びたがらないだろ。なのに今回に限ってはやけにしつこかったし。何がしたかったんだ」

絶対何か魂胆があるはずだ。何を企んでいるのか知らないけど、正直、こういうのは面白くない。

「別に深い意図はねえよ」

そらつとぼけるクオ。あ、そう。それなら俺にも考えがあるよ。

「クオ。正直に全部喋らないと、この前の合宿でのこと、初音さんに話すぞ」

俺がそう言うと、クオの顔が引きつった。

「レン、あのことは言うなって言っただろ!」

「うん、だから、黙っててやるから、隠し事があるんならここで全部白状しろ」

クオは冷や汗を流しながら固まってしまった。……そんなにあのことばらされたくないのか。別に大したことでもないと思うんだがなあ。アニメ見て号泣するのって、そんな変なことでもないだろ。そりゃああの時、クオがボロ泣きしたせいで、みんな引いてたけど。

普段から初音さんの前で「『フランダースの犬』!? その程度のアニメでこの俺が泣くか」とでも宣言してるんだらうか。

「で、クオ、どうするんだ?」

「えーっと……誰にも、特に、ミクと巡音さんには絶対に言うなよ?」

「わかったからとつと喋れ」

俺がそう言うと、クオはうつむきながらぼそぼそとこんなことを

言い出した。

「ミクと一緒にホラー映画を見たかったんだ」

「……なんだよそれ」

理由になってないぞ。

「最後まで聞いてくれよ。ミクはホラー映画が嫌い、俺がホラーを鑑賞してる時は絶対よりつかない。そんなミクと一緒にホラーを見るにはどうしたらいいか！」

妙に力を込めてそう言うクオ。おい……そんなことの為に、わざわざ俺を引っ張りだしたのか？

「それで初音さんの予定を調べて、わざわざ巡音さんが来る日を選んで、俺を呼んだわけ？」

「だって一人だと逃げられるだろ。誰かいたら逃げづらいじゃないか」

巡音さんと俺は、初音さんを引き止めておくための障害物だよ。道理でひたすら帰るな言ってたわけだ。……アホらし。

「うまくすれば、ミクがきゃーって叫んで俺に抱きついてくれるかもって、思ったんだよ……悪かったな」

「……良かったな、夢が叶って」

実際、抱きついてはもらえたわけだし。というか、こいつ、普段からそんなこと考えていたのか。まあ、初音さんは可愛いし、クオがそういう気持ちになるのはわからなくもないけど。けどなあ、一緒に住んでるんだからもつと別のアプローチあるだろ。

大体理由には納得したが、これだけは言つとこう。

「ホラーが嫌いという人にホラーを見せるのは、はっきり言って悪趣味だよ。せめて、もっと大人しいのにできなかったのか？」

「ゾンビはホラーの王道だろ。お前だってゾンビ映画好きじゃねえか」

「ホラー苦手な人と一緒に見たいとは思わない」

他のジャンルはともかく、ホラーだけは苦手な人に下手に見せるもんじゃない。

「もう二度としねえよ。さすがの俺も懲りた。たく、巡音さんぐらいミクも落ち着いてくれりゃいいのに……」

「あれは落ち着いてたんじゃなくて、初音さんが騒ぐから画面に集中できなかったんだと思う」

初音さんが悲鳴を上げ始めてからは、巡音さんは初音さんの方ばかり見ていた。あんな大声で悲鳴をあげられたら、誰だってそつちを見るだろう。

と、クオが急に、妙なことを訊いてきた。

「お前、巡音さんのことどう思う?」

「何だよ藪から棒に」

いきなりそんなこと訊かれたって答えられるか。同じクラスとはいえ、一週間前までまともに喋ったことなかったのに。

「いいから答えてくれ」

……こいつ、また何かるくでもないこと考えてるんじゃないだろうな。

「クオは、巡音さんのことどれくらい知ってる?」

「あんまり知らん。ミクとは仲いいけど、俺はほとんど話したことないし」

「巡音さんの口ぶりだと、よく遊びに来てるみたいだったけど。それで全然話す機会ないわけ?」

よく一緒に映画見るみたいな感じだったもんな。クオはちょっと嫌そうな表情で、こう言った。

「だって俺あの子に用事ないし、たまに話しかけても黙り込んで、結局はミクが代わりに話すし。ミクも何だか俺に冷たいし。で、お前は巡音さんのことどう思うわけ? まだ質問に答えてもらってないぞ」

確かに巡音さんは人と話すの苦手みたいだけど……要するに、クオは巡音さんのことが邪魔なんだろうな。ついでだからもう一つ確認しよう。

「ごめんもう一つだけ教えてくれ。初音さんの方が、巡音さんの家

に遊びに行くことは？」

「ねえよ」

ふーん、そうか。それにしても……クオ、ちょっと大人げないぞ。自分が初音さんの一番になりたいからって、その親友を追っ払おうとするのはさ。というか、俺にどうしてほしいんだよ。

「で、お前いい加減に俺の方の質問にも答えるよ」

「何だったっけ？」

別に忘れてないが、ちょっとからかってみる。

「巡音さんのことどう思うのかって、さっきから何度も訊いてるだろ」

悪いけどお前に同意はしかねる。

「お前は俺にそれ訊いてどうしたいわけ？」

「レン！ 質問に質問で返すなよ！」

「だってお前の意図がわかんないし」

「ああもうっ！」

大体、自分の人間関係に俺を巻き込むなよ。この環境じゃ色々気苦労も多いのかもしれないけどさ。とばかりを受け取る身にもなってくれ。

「……お前の気持ちもわかんなくはないけど、そういうのはよくないと思うぞ」

「はっ？」

「じゃ、俺は帰るよ。あ、クオ。DVD」

クオがDVDを渡してくれたので、俺は家に帰ることにした。

何故ならそれこそが恐怖だから（後書き）

なんかリンパートと比べてずいぶん長くなくなっちゃいましたね、この部分。

余談ですが、書いている私自身はゾンビ映画は苦手………というか、そんな好きでもないです。

ミクの不満

わたしが立てた作戦は完璧だった。まず、わたしがリンちゃんを「映画でも見ない？」と言って家に呼ぶ。そして同じ日に、クオがやっぱり映画を口実にして、鏡音君を連れてくる。後はわたしとクオが喧嘩をする振りをして、二人だけ部屋に残して出て行ってしまふのだ。これで、リンちゃんと鏡音君が部屋の中で二人つきり、という、非常に美味しい状況ができあがることになる。

クオはうまくいくわけないだろう、という態度を崩さなかったけれど、鏡音君を呼ぶことは呼んでくれた。なんでも、このために鏡音君の見たがっていた映画のDVDを買ったらしい。ありがと、クオ。

わたしもリンちゃんに電話をかけて話をする。こっちは簡単だ。リンちゃんは基本的に、わたしの誘いは断らない。二つ返事でわたしの家に来ることになった。

そして当日。わたしとクオは予定どおり、ホームシアタールームで鉢合わせして喧嘩した後、「話をつける」と言って、部屋を後にした。お二人さん、ごゆっくり。

「ところで、第一段階（二人を呼び出して、二人だけにする）はうまくいったけど、この後はどうするんだ？」

部屋で、クオはこう訊いてきた。

「適当なところで部屋に戻って、四人で映画を見ましょう。何も見ないと変だと思われるし。うまくいけばこれで更に親密度がアップするはずよ」

一緒に映画を見たら、きっと親近感とかも湧いてくるだろうし。クオも異論はなさそう。

「ミク、映画は何を見るつもりなんだ？」

「ラブコメよ。とびきりキュートな奴」

えりすぐりのを用意したもんね。可愛くて、ちょっと笑えて、う

つとりできるような奴。これを見たらきつとリンちゃんだつてその気になるわ……つて、クオ、なんで不満そうな表情になるのよ。

「先に俺が選んだ奴見てもいいか？」

「何？」

「ホラー映画」

「……ちよつと！」

「わたしがホラー嫌いって知ってるでしょ？」

クオは、なんでだか知らないけどホラー映画が好きだ。正直、わたしには理解できない趣味だったりする。あんな気持ちの悪い映画のどこがいいのかしら。

ところが、わたしが顔をしかめていると、クオはこんなことを言い出した。

「おい、ミク。お前、二人の仲を取り持ちたいんだろ。だったらホラーを見せた方がいい」

なんでそうなるのよ。

「どうして？」

「うまくいけば、巡音さんが怖がつてレンに抱きつくかもしれないぞ」

え……。でも、リンちゃんがそんな簡単に抱きつくかな……。

「うーん、でも……」

「ミク、アメリカじゃホラーはデートムービーの定番だ。きゃーっ怖いって抱きつかれたら、どんな男だつて悪い気はしないっ！」

妙に力を込めて、クオはそう力説した。ガードの固いリンちゃんも、幾ら怖くても抱きつくとはちよつと思いにくいんだけど、震えて怖がつたりしたら、男の人の目には可愛らしく見えるかもしれない。

「絶対ホラーの方が盛り上がるつて！俺を信用しろ！」

正直、ホラーは嫌だ。でも、画面を見ないようにはしていれば大丈夫よね、きつと。

「うーん、なら、いいけど……」

クオ、ガッツポーズして喜んでいる。そんなにホラーが好きなの？
「ミク、お前も映画が始まったら俺に抱きつけ」

「なんでそうなるのよ？」

「巡音さんがお前に抱きついたら困るだろ。先にお前が俺に抱きついておけばそれを防げるじゃないか」

「……………」

とりあえず、わたしはクオの頬つぺたを力いっぱい引っねっておい
た。

ホームシアターの部屋に戻してみると、リンちゃんと鏡音君は気
まずそうな表情で座っていた。…………おかしいわね。今頃談笑してて
くれるはずだったのに。何か問題でもあったのかしら。

とにかく、今は映画よつ。そんなわけで、わたしはリンちゃんの
隣に座った。わたしの隣はクオの為に開けておく。

そうして、クオが選んだホラー映画とやらを見ることになったん
だけど…………正直、わたしにはとてもじゃないけど耐えられなかった。
何なのよおっ！　なんでいきなり流血沙汰なおっ！？　ぷつつと
キレたわたしは思わずクオの首を絞めてしまい、ホラー映画鑑賞は
そのままストップになった。

まあそんなわけで、結局残りの時間はわたしが選んだラブコメ映
画を見ることになった。…………クオは、ずーっと不服そうにしていた
けれど、仕方がないでしょ。なんでホラーなんかが好きなのよ。

映画を見てお昼を食べて、もう一本映画を見ておやつ　ちなみ
に、おやつはリンちゃんが持ってきたケーキだ。相変わらず美味し
かった　を食べると、リンちゃんは門限があると言って帰ってし
まった。…………あそこのお父さん、異常に厳しいのよね。門限を破つ
たりしようものなら、リンちゃんは一ヶ月は外出禁止だ。うちのお
父さんですら、リンちゃんのお父さんのことは「うーん、ちょっと
あの人はなあ…………仕事の上では問題ないんだが…………」と言っている。

わたしのお父さんがそう言うってことはよほどのことだ。実際、ああいうこともあったし。

ああいうことってのは何かって？ あれはわたしたちが小学校に入ったばかりの頃だった。わたしの家に遊びに来たリンちゃんに、わたしは当時ハマっていた少女漫画を見せた。リンちゃんもつと読みたいというので、わたしはリンちゃんに漫画を何冊か貸してあげた。リンちゃんは大喜びで漫画を持って帰り……。

そして、その夜。リンちゃんのお父さんが苦情の電話をかけてきた。娘に変なものを見せないでくださいって。言っておくけれど、わたしが当時読んでいたのは、小学校低学年向けの、たわいもない内容の漫画だった。過激な内容でもない。ほのぼのした、本当に普通の少女漫画。

次の日、リンちゃんはしょげかえって漫画を返しにきた。お父さんに、ひどく怒られたらしい。あんなくだらないもの見るんじゃありませんって。あんまりよね？ わたしは、リンちゃんがあまりに落ち込んでいるので、うちに遊びにきたときこっそり読めばいいよって言ったんだけど、リンちゃんは、あれ以来、漫画に手を触れなくなってしまった。

後でわたしは自分のお父さんから聞いたんだけど、リンちゃんのお父さんは、あの時、電話口で漫画の害について延々と喋り倒したらしい。あんなもの読ませるとバカになるとか、勉強しなくなるとか、子供のためにならないとか、そんなことだ。うちのお父さんは自分が漫画が好きなので、あくそのですかと聞き流していたらしいんだけど、リンちゃんのお父さんが「あんなもの読ませるなんて、お宅の教育方針はどうなっているんですか」と言った辺りで、さすがにカチンと来て、「それは、こちらへの戦線布告と受け取ってよるしいのかな？」と冷たい声で言っちゃったんだそうだ。それで向こうもお互いの立場　わたしのお父さんの経営する会社と、リンちゃんのお父さんの経営する会社は、大きな繋がりがあるので、トップ同士が喧嘩するわけにはいかないのだ　を思い出して、黙っ

ちゃったんだって。さすがはわたしのお父さんよね。わたしのお母さんは、お父さんはいつも自分をお姫様みたいな気分にならせてくれるって言うてるの。だから、わたしも、将来結婚するとしたら、絶対にそういう人がいいの。これは譲れないわ。

さてと、鏡音君も帰っちゃったし、作戦の第二弾を考えなくちゃ。何がいいかしらね？ クオももつと積極的にアイデア出してくれればいいのに。

ミクの不満（後書き）

一応、ホラーはデートムービーとしての需要はあります。

ブレインデッド

その日の夜、俺は晩飯の後で、姉貴に訊いてみた。

「今日、クオから映画のDVD借りてきたんだけど、姉貴も見る？」

「何借りたの？」

「『ブレインデッド』ゾンビ映画。ピーター・ジャクソン監督」

ちなみに、姉貴は変な映画が結構好きだったりする。弟の俺でも、姉貴の映画の趣味をはつきりとは把握していない。

「ピーター・ジャクソン……ああ、『乙女の祈り』の監督ね」

「姉貴……そこは『ロード・オブ・ザ・リング』の監督ね、って言うところじゃないの？」

「いちいちうるさいわよ。……そうね、私も見ようかな」

というわけで、食後は姉貴と二人で映画鑑賞会になった。

「何あの格好、ありえなくいつ」

「今切断した手、どう見ても作り物……」

「人間の解体シーンなんて、下手にリアルでも困るわよ」

「ひつどい親だなあ」

「主人公！ 変だつて気づきなさいよ！」

「神父さんがなんでカンフー？」

「これ……うるさいスジから冒流つて言われぬない？」

「この頃はまだ無名だから、チエックされてないんじゃない？」

「つていうかゾンビつて死んでるんでしょ？ 子供なんて作れるの？」

「俺に訊かないでくれよ」

「うわーっ……あのおじさん、実は強かったのね」

「主人公やっと思覚めたか……つて、遅いだろっ！」

「これつて一応ハッピーエンドなのかしらね？」

「じゃないの？ ゾンビはやつつけたし、うっとうしい母親は死んだし、恋人もできたんだから」

姉貴と二人で画面に突っ込みを入れながら見ていると、あつという間に映画は終わってしまった。何せ突っ込みどころがありすぎるでも、映画として見るとちゃんと面白い。ストーリーも、ちゃんと一本の軸が通してあるし。

「あゝ面白かった。こんなに笑えるゾンビ映画は確かに無いわ」

ビールを飲みながら、姉貴はそんなことを言った。

「姉貴はゾンビ映画って怖がらないよね」

「今日もけらけら笑いながら見ていた。」

「今のをどうやって怖がれというのよ」

「これだけ血と肉片が飛ぶんだから、気分悪くなる人はいると思うよ。グロがいきすぎてギャグになってるのは認めるけど」

「なんというか、ゾンビ物って作り物くさくて怖がる気になれないのよね。心理系だと確かに怖いと思うんだけど。で、どうしたのよ急に」

俺は今日、クオの家であったことを姉貴に話した。

「うーん……まあ、その辺りは個人差が大きいから。駄目な人は駄目なんじゃない？ 私の知り合いにも、ホラー映画って聞いただけで逃げ出しかねない人いるし。そいつ、男なんだけどね」

「それも結構すごいな。」

「姉貴は、その人にホラーを見せてみたいって思ったりする？」

「ちよつとは思うかな？ ま、実際にはやらないけどね。泣き出されたりしたら寝覚めが悪いでしょ」

「そりゃそうだ。今日、そういうことにならなくて良かったかもしれない。」

「姉貴はさ、映画のジャンルだったら何が一番好き？」

「ふと思いついて、俺は姉貴に訊いてみた。」

「難しいこと訊くわね……」

「姉貴は考えこんでしまった。」

「難しいか？」

「だって、面白いジャンルっていっぱいあるし。だから一番を選べ

と言われると迷うのよね。あんただって、SFとホラーとどっちが好き？ って訊かれたら返事に詰まるでしょ？」

「……確かに。じゃ、特に好きなジャンルをあげてみて、って言われたら？」

「特に好きなジャンル？ そうねえ、まずはアクション全般でしょ。それからコスチューム物もいいわね」

えっらい差がある組み合わせだな。

「ホラーも好きだし、最近はファンタジー物も面白いのが増えてきたし……」

姉貴は楽しそうにあれこれと作品の特徴を交えて話し始めた。うん……。

「どうしたのよ、難しい顔して」

「いやさ、今姉貴に、好きな映画のジャンルについて訊いたら、そうやってばーっと喋りだしただろ」

「訊かれたら大抵は喋るもんじゃない？」

だよなあ。じゃ、なんであの時、巡音さんはああいう反応だったんだろう？

「訊いたら黙られちゃったんだよ」

「誰に？」

「クオの家で会った初音さんの友達」

クオは何度か家に遊びに来ているので、姉貴はクオの家庭環境のことは大体把握している。

「あんまり言いたくないジャンルが好きだったんじゃないの？ ミリタリー映画とか」

「それって言いたくないジャンルになるわけ？」

「『フルメタル・ジャケット』が好きです、なんて男の子の前じゃ言いくいわよ。変人扱いされちゃう」

巡音さんは『フルメタル・ジャケット』を好きそうには見えませんが……。っていうか、それは姉貴が好きな映画じゃないか。男の前でそれ言って変人扱いされた経験でもあるんだろうか。

「『椿姫』を読むような子なんだけど」

「別に両方好きでも変じゃないでしょ」

そりゃそうだが……あの時の反応は、そついう感じじゃなかったんだよなあ。

「そもそも『フルメタル・ジャケット』は不憫な映画なのよ！ 真面目なテーマを扱った作品なのに、リー・アーメイのおかげですっかりネタ扱いされてるんだから！」

俺が考え込んでいる間に、姉貴はなにやら熱を込めて喋り始めた。何も俺の前で熱弁しなくても……。やっぱり姉貴、誰かにドンピキされたんだろうなあ。

ブレインデッド（後書き）

名前が出てませんが、レンの姉はめーちゃんです。

今回かなり映画の趣味が変な人になってますが、これは今作だけの設定で、また別の作品では、違う趣味になってると思います。…多分。

ただ、今回、二人が見る映画は『ブレインデッド』でなきゃいけないんですが。

檻の虎に太陽を見せて

クオの家で映画を見てから、数日が経過したある日。俺は学校の図書室で『RENT』のサントラを聞きながら、歌詞をチエックしていた。この前見た舞台は字幕がいいかげんで、話の意味を取りづらかったんだよな。そんなわけでネット通販でサントラを購入したんだが、歌詞カードがついていなかった。幸い、歌詞を全部載せてくれているウェブサイトがあったので、そこからプリントアウトしてきたけど。

しかし、映画だとかなり曲がカットされていたんだな。「クリスマス・ベルズ」と「ハッピー・ニュー・イヤー」がカットされているのはもったいなさすぎる。映画じゃ表現しづらかったんだろうけど。

曲を聞きながら、ノートに思いついたことを書き留める。この辺りは台詞が交差していて聞き取りにくいな……ちよっと一息入れるか。プレーヤーを止めて……あ。

書棚の近くに巡音さんがいて、思い切り目があった。大体いつも真っ直ぐ帰ってるのに、こんなところにいるなんて珍しいな。

巡音さんはしばらくそのまま立っていたが、やがて、こつちへやってきた。声をかけられそうな気がしたので、俺は片方の耳からイヤフォンを抜いた。

「ここ……空いてる？」

図書室の勉強用の机は四人がけだが、俺は一人で座っている。他の三つは空いている。訊かれたので、俺は頷いた。巡音さんが俺の向かいの席に座る。そのまま、巡音さんは本を読み始めた。

……何読んでるんだろう。様子を伺ってみたが、本を机の上に置いた状態で読んでるので、タイトルがわからない。

「何読んでるの？」

気になったので、結局訊いてしまった。もちろん、声のポリュー

ムは落としている。ここは図書室だ。

巡音さんは本を立ててみせてくれた。『アグネス・グレイ』と書いてある。

「どついう話？」

「……さあ。まだ読み始めたばかりだから
そりゃそうか。」

「鏡音君は、勉強？」

今度は巡音さんの方が訊いてきた。違うけど。でも、こんなもん
広げていたらそう見えるか。辞書も置いてあるし。

「いや、これはただの趣味」

俺は印刷してきた歌詞を、巡音さんの方に差し出した。

「詩？」

「歌の歌詞」

俺はポケットに突っ込んでいたプレーヤーを取り出した。

「これのね。聞いてみる？」

俺は何気なくそう言った。巡音さんはしばらく考えてから よ
く考え込む子だな 頷いた。

巡音さんにイヤフォンを渡し、彼女がそれを耳に差したのを確認
してから、曲の一覧を表示して、「レント」を選択する。舞台でか
かる長い曲はこれが最初だ。……あ。これじゃなくて、「シーズ
ズ・オブ・ラヴ」の方が良かったかな。

「……ひゃっ！」

再生するやいなや、巡音さんはびっくりしたような声をあげて固
まってしまった。えーと……そんなショックを受けるような曲でも
ないと思うんだが。俺の方がびっくりだよ。

停止ボタンを押すと、巡音さんは強張った表情のまま、イヤフォ
ンを外した。

「……大丈夫？」

「ごめんなさい。こういうの初めて聞いたから、驚いちゃって」

ロックなんか別に珍しい音楽でもなんでもないとと思うんだが……

普段何聞いているんだろう。

「巡音さんは、普段はどんな音楽を聞いているの？」

「クラシックだけど」

お嬢様というのはそういうものなんだろうか。でも確かこの前クオの奴、初音さんの誕生日プレゼントだとか言って、アイドルのCD買ってたよな。

「クラシックが好きなんだ」

「……多分」

おーい、返事になってないぞ。

ここで、俺はあることを思いついた。

「じゃ、ちよつとこれ、聞いてみてくれる？」

巡音さんはあんまり気が進まなそうだったが、もう一度イヤフォンを耳に差した。俺は曲の一覧から「ユア・アイズ」を選択する。

巡音さんは微妙に緊張した表情で、曲を聞いている。途中から「あれ？」と言いたげな表情になったが、最後の方で驚いたようにこう言った。

「なんでミミの名を呼ぶの？ ムゼッタのワルツでしょ？」

「あ……やっぱりわかるんだ」

『RENT』は、十九世紀のパリを舞台にした『ラ・ボエーム』というオペラの翻案だ。でもって、『RENT』の中でロジャーが何度かギターで爪弾いている曲が、『ラ・ボエーム』で使われている「ムゼッタのワルツ」という曲だったりするんだそうだ。最も俺は『ラ・ボエーム』を見たことがないので、どんな風になっているかはよくわからないし、原曲の「ムゼッタのワルツ」という曲も聞いたことがない。

すぐにわかってこう言ったということは、巡音さんは『ラ・ボエーム』を見たことがあるんだな。

「……かなり感じが変わっていたから、名前が出てくるまでは自信がなかったんだけど」

「作中でもそう言われるけどね。『それじゃムゼッタのワルツだっ

てわからないよ』って」

字幕では「パクリではありません」になってたりするけど。それじゃ意味が全然違うだろ。

巡音さんは、何がなんだかわからないという表情になった。あ、いけない。『ラ・ボエーム』のことは知っていても、『RENT』のことは知らないんだ。俺は『RENT』についてざっと説明した。「これ『RENT』っていうミュージカルの曲なんだよ。オペラの『ラ・ボエーム』を現代のニューヨークに翻案した作品。ちなみに、前に巡音さんと劇場で会った時に見たのもこれなんだけど。で、今のは主人公のロジャーが、最後の方でミニに歌う曲」

「ロジャー……ロドルフォのこと？」

「そうだよ」

一応あらずじとキャラクターはネットで調べたので知っている。

ロジャーはロドルフォ、マークはマルチェロ、モーリーンはムゼッタだったはず。

「どうしてロドルフォがムゼッタのワルツを歌うの？」

「さあ……何でだろう？ でも、三回ぐらいこのフレーズ弾いてるよ」

さすがにそこまではわからん。ラーソンが単に気に入っていただけかも。

「ロドルフォが、『わたしが街を歩くと、誰もが立ち止まって、わたしの美しさに見とれるの』って歌うの？」

巡音さんがそんなことを訊いてきたので、俺は想像して思わず笑い出してしまった。……そんなことを言うロジャーは嫌だ。いや、向こうは『RENT』を知らないから仕方ないんだけど。

「……さすがにそれはないよ。あくまでギターで弾いてるだけ。その台詞自体は別の曲にあわせて、ムゼッタに当たるキャラクターが歌ってるけどね」

「ムゼッタのワルツ」はバラバラにされて、『RENT』の中にちりばめられている。曲はロジャーがギターで爪弾き、歌詞はモーリ

ーンが全然違うメロディに乗せて歌う。タイトルだけを真似た「モ
ーリンのタンゴ」という曲もある。

「この曲の歌詞自体は『君こそが探し求めていた歌なんだ』とか、
そんな感じ」

「その台詞、『ラ・ボエーム』にも似たのがあるわ。『詩をみつけ
たんだね』ってみんなが言うの」

ロツカーのロジャーは、『ラ・ボエーム』では詩人だったよな。
映像ドキュメンタリー作家のマークは画家、ハツカーで教師のコリ
ンズは哲学者、ストリートドラママーのエンジェルは音楽家だ。

「へえ……『ラ・ボエーム』は見たことがないからなあ。一度見て
みたいとは思ってるんだけど」

さすがにオペラは敷居が高い。巡音さんにとってはそうでもない
んだろうけど。

「あ、ごめんなさい。携帯に着信入ったみたい」

巡音さんは鞆を開けると、携帯を取り出した。確認して、ちよっ
と残念そうな表情になる。

「誰から？」

「運転手さん。今日は車の調子が悪いから少し遅れるって、少し前
に連絡があつたの。で、今、迎えに来たって」

ああ、それで、図書室にいたのか。巡音さんはさようならを言っ
て、帰って行った。……あれ。読みかけの本は借りていけないんだ。

檻の虎に太陽を見せて（後書き）

どうでもいいことですが、このシーンでリンが読んでいる本のタイトルで、一時間ぐらい悩みました。いや、最初は別の本を設定していたんですが、その本だと、音楽の話そっちのけで本の話になりそうだったもんで……。

こういう、「創作の中に登場させる作品」って、セレクトが難しいんですよね。大体いつもこれで悩みます。

作戦会議中のミク

わたしは現在、クオと喫茶店で作戦会議の真っ最中。作戦というのは当然、リンちゃんと鏡音君の仲を親密なものにするためのものだ。

同じクラスとはいえ、基本的に二人は全くといっていいほど話す機会がない。というより、リンちゃんはわたし以外と喋ることがほとんどないのよね。だから何としてでも、二人つきりにして、話をさせる必要がある。親密な関係になるのに一番必要なのはフランクな会話よっ。

「とにかく、どうにかしてもう一回呼び出したいの。クオ、何かいい案ない？」

クオはため息をついた。もう、なんで乗り気になってくれないのよ。

「なあ、ミク……もう止めようぜ、こんなこと」

わたしは、大きく首を横に振った。一度や二度の失敗で諦められますかっての。

「絶対に嫌」

そう答えると、クオは「しょうがないな」と言いたげな顔になって、今度はこんなことを言ってきた。

「そもそもレンの奴をお前んちに呼ぶのに無理があるんだよ」

どうして？

「だって、クオと鏡音君は友達でしょ？ 友達の家遊びに行くのって当たり前のことよね。クオはよく鏡音君の家に遊びに行くじゃない」

「だからさあ、お前んちはお前んちであって、俺んちじゃないの」
そうしたら、クオはこんなことを言い出した。あのねえ。お父さんもお母さんも、家に預かる以上、クオは自分たちの息子だと思っ
て責任持って面倒見ますって、叔父さん叔母さんにそう宣言してる

んだけど。

「今はクオの家よ」

だから遠慮なんかしなくていいのに。クオってば、変なところで律儀なんだから。

クオは考える表情になった後で、今度はこんなことを言い出した。

「レンに怪しまれたんだよ」

「どういうことかしら？」

「怪しまれたって？」

「この前、なんでいきなり自分を家に呼んだのかって、しつこく訊かれた。何か魂胆があるんじゃないかって。考えてもみるよ、レンと知り合って一年半なのに、俺があいつをお前んちに呼んだの、この前が初めてなんだぜ」

うーん、鏡音君がそんなに察しがいいなんて、予想外だわ。伊達にトップクラスの成績は取ってないってことかしら。あれ、ちょっと待って。

問い詰められたってことは……クオ、まさか、全部綺麗さっぱり喋っちゃったんじゃないでしょうね？ わたしは思わずクオの顔をまじまじと見てしまった。

「クオ、まさかとは思っけど」

「誓って計画のことは喋ってない。適当にごまかしておいた」

即答するクオ。ほっ、良かった。喋られたら何もかも終わりだもの。それにしても、そうになると、なんかもつと上手な理由を考えないよね。

何かイベントでもないかな。……今は十月の半ばよね。

「そろそろハロウィンだし、パーティーをするってのはどう？」

「断言するが、そんな口実じゃ怪しまれるだけだし、あいつは来ない」

きっぱりとそう言うクオ。うーん、ダメか。リンちゃんならパーティーやるって言えば来てくれるんだけどな。

家に呼ぶのがダメなら……じゃ、家じゃなければ？

「うーん……わたしの家に呼ぶのが難しいとなると……あ、そうだわ。みんなどこかに遊びに行かない？」

それだったら、もつとクオも口実を考えやすいかも。

「行くつてどこへ？」

「リンちゃんは門限があるし　あそこのお父さん、門限にはすぐうるさいのよ　近場じゃないと無理だけど」

移動は我が家の車を使えるから、かなり自由が利くはず。

「ゲーセンとか？」

そんな提案をするクオ。確かにクオはよく鏡音君と遊びに行ってる。クレーンゲームのぬいぐるみを、わたしにおみやげにくれたこともあつたつけ。でも、問題が一つ。

「リンちゃんをゲームセンターに誘うのは無理だと思う。ゲームやらないもの」

漫画類が全面禁止なリンちゃんの家だもの、当然、ゲーム類も一切禁止だ。ゲームセンターじゃ、鏡音君は大丈夫でも、リンちゃんの方を誘い出せない。

「じゃ、カラオケは？」

「それも厳しいと思う。リンちゃん、クラシックしか聞かないから　いまどきの音楽禁止つてのもどうかと思うんだけどね……。もちろんアニメもダメだし、ライトノベルとかもダメ。おかげでリンちゃんは、普段はクラシックしか聞かせてもらっていないし、読ませてもらえるのは文学みたいな固い本ばかり。

「あんまり変なところだと、レンを引つ張り出すのが難しくなるぞ　一般的な高校生の遊べる場所じゃないと、確かに鏡音君がまた変に思うだろうなあ。えーっと、どこか遊べそうな場所は……。」

「……遊園地なんてどう？」

何も考えずに遊ぶのなら一番適任なはずだ。ここなら、何とかリンちゃんを説得する自信がある。

「遊園地か……それならいけるかも」

「でしよでしよ〜」

わたしは胸を張った。クオに呆れられちゃうかな。でも、これくらいいいでしょ？

「で、いつにする？」

「リンちゃんはまだ足の怪我が治ってないから、足が治ったら誘ってみる」

遊園地となると結構中で歩くから、捻挫が治ってなかったら辛いわよね。そうになると、来月になっちゃうなあ。まあ、果報は寝て待って言うし。これがダメならまた次を考えるだけよ。

作戦会議中のミク（後書き）

場所が喫茶店なのは……多分、ミクはクオと二人で喫茶店に入りた
いんだと思います。

芸術家の暮らし

その次の日の昼休み。俺は購買部でサンドイッチとおにぎりを買うと、校庭でそれを食べながら音楽を聞いていた。ちなみに今日も聞いているのは『RENT』のサントラだったりする。何度聞いても『RENT』の曲はいい。

食べ終わった後も、俺はずっと『RENT』を聞いていた。……あれ、誰か来たぞ。

顔を上げると、そこにいたのは巡音さんだった。どうしたんだろう。俺は耳からイヤフォンを外した。

「……巡音さん、俺に何か用？」

「あ、えっと……」

劇場で会ってから妙に縁があるが、そのおかげで、ちょっとは彼女のことがわかってきた。無口とか人付き合いが悪いとか言われているらしいが、実際のところは、ただ単に喋るのが苦手なだけだろうだ。待ってればそのうちに話すだろう。

「それ、昨日と同じ曲？」

「そうだけど」

まさかそれ訊くためだけに、わざわざ来たわけじゃないだろうなあ。巡音さんはしばらくためらった後、手に持っていた紙袋をこっちに差し出してきた。

「これ……貸そうと思って。『ラ・ボエーム』のDVDなの」

……え？俺は紙袋を開けてみた。確かにDVDが入っている。パッケージはよりそう二人の男女の写真で たぶん、ロドルフォとミミだろう 『La Boheme』と書かれていた。

オペラってDVD出てるのか。知らなかったぞ。

「え……いいの？」

「見たいって、言ってたから」

わざわざ持ってきてくれたのか。へえ、なんというか……。

「じゃ、遠慮なく貸してもらおうよ。……あ、返すの、多分週明けになると思っけど、それでもいい?」

平日は他にやることあるから、見るのは週末になるな。

「ええ。……それじゃあ」

巡音さんは帰って行った。

土曜日の夜、晩飯の後で、俺は姉貴にDVDを見ていいか訊いた。俺の部屋にはPCがあるので、DVDならそれでも見れるけど、居間のテレビの方が画面が大きいから、できればこっちで見たい。

「何見るの?」

「オペラ『ラ・ボエーム』」

「……珍しいもの見るわね」

姉貴は驚いたようだった。ま、それは俺も認めよう。

「『RENT』の元ネタだから、前から一度見たいと思ってたんだよ」

「別にいいわよ。今日は特に見たい番組も無いし」

姉貴がそう言ったので、俺はDVDを持ってきて、プレーヤーに入れて再生ボタンを押した。姉貴も暇なのか、焼酎のお湯割りを飲みながら一緒に見始める。

パッケージの裏面によれば、これは外国の大きな劇場の公演を収録したものだそうで、最初に映るのはその劇場の外観だ。なんだか既に別世界って感じがするんだが……中も広いし、内装もえらく豪華。早いところ中身が見たいので、この辺りは倍速にしておく。

序曲(かなり明るい)の後で、いよいよ幕が上がって、オペラが始まる。セット凝ってるなあ。十九世紀のボロアパートの屋根裏がしっかりと再現されてる。ロドルフォとマルチェロの衣装も、いかにも当時の人が着てるみたいない感じだし。二人とも若者のはずなのに、役をやっているのがおっさんなのがひっかかるけど。どう見ても両方とも四十代だ。歌はさすがに上手い。普段聞く音楽とは全然違う

歌い方だけど、上手いのはわかる。朗々と響くというか、声量のあ
る歌声だ。

見ていると、『RENT』に登場したのと同じ台詞やシーンがち
よこちよこできてきて面白い。「オウムのソクラテスは天国に羽ばた
いていったのさ」は、「秋田犬のエビータは地獄に落ちたの」にな
ったんだな。ミミの「ロウソクに火を点けて」や、「みんなわたし
をミミと呼ぶの」もある。ロドルフォがミミの手に触れて「冷たい
手だね」もちゃんと入っている。第二幕でのカフェの前で物売りが
呼び交わすシーンは「クリスマス・ベルズ」にもあるし、子供が玩
具屋の後を追いかけていくのは、ヤクの売人の後をジャンキーが追
いかけていくシーンに変更されている。

一方で違うところも多い。コリンズとエンジェルに当たる、コッ
リーネとシヨナルはあんまり目立たない。ロドルフォとミミは一
目で恋に落ちるし、積極的なのはロドルフォの方だ。「僕が暖めて
あげましょう」とか言って、ミミの手さすってるし（『RENT』
では、ミミの方がロドルフォに抱きついて誘いをかける）……その
くせ第三幕では貧乏な自分と一緒にだと未来がないから、と、よくわ
からない理由でミミを捨てる。貧乏なのはどっちもどっちのはずな
んだが……。ムゼッタはマルチエロと一度はよりを戻すし、第三幕
の冒頭の牛乳売りのシーンは『RENT』には無い。気になってい
た「ムゼッタのワルツ」は、巡音さんが言うとおり、かなり感じが
変わっている。って、こっちがモトネタか。歌詞は冒頭部分のみ「
テイク・ミー・オア・リーヴ・ミー」と共通だけど、『RENT』
が喧嘩別れするシーンになっているのに対し、こちらではよりを戻
す。……なんというか、マルチエロだらしないな。これがいわゆる
「惚れた弱み」という奴なんだろうか。

一番違う印象を残すのは、やっぱり最後の幕切れだろう。病気で
死にかけている割に『ラ・ボエーム』のミミはよく喋るが、それは
まあ置いておいて、『RENT』ではミミは死なず、最後にみんな
で、「ノー・デイ・バット・トゥデイ」を歌い上げて賑やかに終わ

る。一方『ラ・ボエーム』では、ミミは死んでしまい、ロドルフォが彼女の名を悲痛な声で呼んで、暗い音楽で幕切れとなる。

……うーん、俺はやっぱり『RENT』の方が好きだな。『ラ・ボエーム』はなんというか、話自体がすごくあっさりしているというか、シンプルな感じだ。その割に長いけど、これは登場人物が同じことをずーつとやらたら歌ってるせいだろう。『RENT』の方が密度が濃くて、ぎゅっと濃縮されている感じがする。それに、『ラ・ボエーム』の幕切れは正直好みじゃない。最後のカーテンコールを見ながら、そんなことを考えていた時だった。

「どんだけ、こいつはヘタレなのよっ！」

不意に姉貴が叫んだ。

「ヘタレって？」

「このロドルフォとかいう男よ！」

げっ、やばい。姉貴酔ってる。しかも悪酔い。普段は酔ってもケラケラ笑ってるだけで苦労しないんだけど、たまにこうなるんだよね……。オペラに集中してたせいで、姉貴の酒量にまで気を配ってなかった。焼酎の瓶、空になってるよ。

「なあにが『一番悪いのが僕の部屋の寒さなんだ』よ！ かつこっけちゃってさ。どうせ同じ貧乏人なんだから、最後まで傍にいてやんなさいっての！ バツカじゃないの。そんなんだから、あんたは死ぬ時も彼女の手すら握ってあげられないのよ」

参ったな……。こうなると姉貴は止まらないんだ。

「大体あんたに甲斐性つてもんがないからこうなるんでしょうがっ！ バイトの一つでもして薬代でも稼いできなさいっての！ あれこれ言うのはそれからになっ！」

「あゝそうだね」

俺は適当に流しつつ、DVDをプレーヤーから取り出してケースに閉まった。このままにしておいて、姉貴に借り物のDVDを壊されても困る。

「だあいたいこの脚本もおかしいのよっ！ なんでわざわざムゼツ

夕が『ミミは私と違って天使のような女です。だからお救いください』なんて言い出すわけ？ 自分の勝手な好みを押し付けてんじゃないわっ、どっちらけよっ!」

「それじゃ、俺はもう寝るから」

酔っ払った姉貴の相手をしてられる程、俺も暇じゃない。こういう時は放置しておくに限る。俺はDVDケースを抱えて、自分の部屋に戻った。

次の日の朝、俺が階下に下りていくと、姉貴が梅干を入れたほうじ茶を啜っていた。どうやら、派手な二日酔いになったらしい。

「あゝ、レン、おはよう……」

「おはよう、姉貴。二日酔い？」

姉貴はうなずいた。まだ顔が青い。

「私……昨日、何かした？」

「ひたすら大声でロドルフォの悪口言ってた」

姉貴はバツの悪そうな顔になった。

「んゝ、なんか、あれ見てたら腹が立つちゃって、気がついたらくいぐいやっっちゃってたのよねゝ。次の日は休みつてのもあつたし」

「そんな怒るようなもの？」

ロドルフォがヘタレというのに異論はないけど、そこまでヒートアップしなくてもいいじゃないか。確かに、恋人が死ぬまでつきそつた、『RENT』の Korsunz と比べるとなんだかなあと思うけどさ。

「舞台に乗り込んでって、あいつどついでやりたいたったわ」

そんなきつぱり言わなくても。っーか、姉貴は本当にやりそうで怖い。

「レンはあれ見てどう思ったの？」

「『RENT』との共通点とか相違点とか、色々見えて興味深かった」

「あんだ、本当に『RENT』好きねえ……」

どうでもいいけど、『RENT』のロジャーはもっとかっこいいよな。もしかして、プッチーニがこれ発表した当時は、ロドルフォみたいなのがイケてる男だったんだらうか。

……幾らなんでもそれはないな、うん。

「姉貴は、今日はどうする？」

「ん〜、まだ頭痛いから家でゆっくりしてる。あんたは？」

「俺？ 俺は映画でも見に行ってくるよ」

折角の日曜だし、天気もいいし、家でくすぶっているのはもったいない。俺は冷蔵庫を開けて、昨日の残り物を取り出した。料理するのは面倒だから、朝飯はこいつでいいや。

「姉貴も食べる？」

「いい……食欲無いから」

「わかってんならそんなに飲まなきゃいいのに」

「うっさいわね」

姉貴は不機嫌そうにそう言った。これ以上刺激するとぶちきれんな。ここまでにしとこう。

芸術家の暮らし（後書き）

意外と、専門外の分野のことって気づかなかつたりするんですね。

最近はオペラといっても色々な演出がありますが、『ラ・ボエーム』
に関しては、奇をてらった演出というのは見たことがあります。
四回ぐらい見ますが、大体どれも同じような感じでした。

凍るか、燃え上がるか

月曜の朝、登校してきた俺は、学校の校門のところに、見覚えのある車が止まっているのに気づいた。あれは巡音さんのところのだから、見ていると、運転手さんが車から降りて後部座席のドアを開けた。車の中から巡音さんが出てくる。運転手さんは一礼して車に戻り、そのまま発進して行った。巡音さんは、校舎に向けて歩き出す。

「おはよう、巡音さん」

俺は、その背中に向けて声をかけた。巡音さんが振り向く。

「あ……おはよう、鏡音君」

……なんだか元気が無いような？ もともと淡々と喋る子だけど、今日はいつもにも増して淡々としている。昨日夜更かしでもしたのかな。

「週末にあれ見たんだ。巡音さんが貸してくれた『ラ・ボエーム』。俺はそこで言葉を止める。巡音さんが「どうだった？」と訊いてくると思ってた。

「そうなんだ……」

えーと。想像してたのとは全然違った反応が返って来たので、さすがにちよつと戸惑う。

「姉貴が暇だったらしくて一緒に見たんだけど、見ていたら姉貴が怒り出しちゃってすごかったよ。『こんのヘタレ男』って、ロドルフォのことを怒鳴りまくっちゃって。うちの姉貴、感情の起伏が激しいもんだから。何もそんなに怒らなくてもいいと思うんだけどさ。自分の感想よりも姉貴の反応の方がネタになりそうだったので、こつ振ってみる。驚くとか笑うとか呆れるとか、何か反応が出てこないかなと思ってる。

「……………」

無反応だよ。……よく考えてみたら、俺は巡音さんに自分の家族構成のことを話したことがなかった。いきなり知らない人の話を出

されて戸惑ってるのかな。

「巡音さんはどう思う?」

結局こう訊いてみる。まあ幾らなんでも巡音さんは、姉貴みたいに怒り狂ったりはしないだろうけど。

「……お姉さんのこと?」

いや、姉貴のことじゃなくって。って、姉貴の話を出したのは俺の方が。

「そうじゃなくて、『ラ・ボエーム』のこと」

「プッチーニの代表作の一つよね。彼の作品の中では一番ロマンティックと言われている、現代でも人気が高いわ」

あのう……。何その「オペラ手引書」の説明文みたいな台詞……。

「俺が訊きたいの、そういうのじゃないんだけど」

巡音さんの返事は無い。……要領を得ない会話に、さすがに俺もいらいらしてきた。

「だからさあ、巡音さんは『ラ・ボエーム』をどう思っているわけ?」

「……………」

何で黙るんだろう? 別にどんな反応が返って来ても驚きゃしないんだけど。何せ姉貴がああだったからなあ。巡音さんが姉貴と同じことを言うとは思えないし。

「何も評論家みたいなこと言わなくてもいいから。『こんな恋愛してみた』とか『ミミよりもゼツタの方がすてきだと思う』とか、そんな単純なのでいいんだってば。なんならうちの姉貴みたいに『ロドルフォのヘタレ顔を洗って出直してきやがれ』とかでもさ。なんかないの?」

でも、巡音さんの返事はこうだった。

「別に……………」

「巡音さんには自分の意見ってものがないの?」

思わず、俺はかなりきつい調子でそう言ってしまった。言った瞬間、巡音さんがはじかれたように顔をあげる。……やべっ。やつち

まった。

「そんなこと……訊かないですよ……」

俺の見てる前で、巡音さんが自分の肩を抱いて、震えだした。様子がおかしい。

「……巡音さん？」

「それに……そんな言い方しないでっ！ 言われても困るの！ わたしは……わたしはっ……！」

悲鳴みたいな声だった。俺は啞然として、巡音さんをみつめた。どうしちやっただ？ それに、ここは校門だよ。周りの視線が痛い。

「ちよつと巡音さん、落ち着いて」

俺は腕を伸ばして、巡音さんの肩を抑えた。まずは落ち着いてもらわないと。これじゃ話もできやしない。

巡音さんは目を見開いて、こっちを見ている。その身体がふらつとよるめいて……。

「ガラスが……」

「巡音さん？ ちよつと、巡音さん!？」

俺は倒れかけた巡音さんの身体を咄嗟に支えた。げ……気を失っちゃってるよ。おまけに真っ青だ。そんなに具合が悪かったのか？ まずいことしちやっただな……。

「巡音さん、しっかりして」

軽くゆすつてみるが、目を覚まさない。このままにはしておけないな。保健室に連れて行こう。

あの後、俺は通りかかった知り合いの手を借りて 幾らなんでも、気絶した人間を担いで歩くのは無理だ 巡音さんを保健室に運び込んだ。

「先生、巡音さんはどうしちやっただんですか？」

校医の先生に俺は訊いてみた。

「貧血でしょうね。この年頃の女の子にはよくあることよ」

そう言って先生はため息混じりに、ベッドの上の巡音さんに視線を向けた。

「ただでさえ最近、雑誌とかの影響で過激なダイエットに走っちゃって、そのせいでひどい貧血を起こす子が増えているのよね……」

「ダイエットが必要そうには見えませんか……」

そもそも、ダイエットなんてしてるのか？ 初音さんの家で会った時は、普通に食事してたけど。

「そういう子の方がダイエットに血眼になっちゃうのよ。全く、世の中の風潮にも困ったものね……」

……先生、何だか完全にダイエットのせいって決め付けちゃってるけど、せめて本人の口からダイエットしてるかどうかを聞いてから、そう言ってくれませんか。

俺は気を失っている巡音さんを見た。血の気が無いせいか、ひどく弱々しく見える。

「ところであなた、そろそろ行かないと、授業が始まっちゃうよ」

正直言つとあんまり行きたくない。この状態の巡音さんを放っておくのは気が進まないし。

「……傍についてたら駄目ですか」

「あなたが残つていてもできることなんてないでしょう？ むしろ邪魔なんだから、早く行きなさい」

そこまできっぱり言わなくてもいいじゃないか……。俺は恨めしげに先生を見たが、向こうは全然動じていなかった。仕方ない。

「わかりました。行きます」

「わかればよろしい」

……なんかいらいらするな。

結局、巡音さんは教室には戻って来なかった。俺は昼休みに保健室に行ってみたが、校医の先生に「早退した」と言われてしまった。

状態をしつこく詮索するとまたあれこれ言われそうだったので、そこで引き上げる。

その日、俺は結局授業にも部活にも集中できなかつた。らしくないぞ、と、自分で自分に突っ込みを入れてみるが、事実なんだから仕方がない。

「……レン、お前、今日なんか変だぞ」

クオにまでそう言われてしまった。

「なあ、クオ。あのさ……」

「なんだよ」

「……やっぱいいや」

幾らなんでも巡音さんのメールアドレスは知らないだろう。初音さんなら知っているだろうけど、そのためにクオに初音さんに連絡してもらおうのもな……。

「言いかけたことは最後まで言えよ」

「大したことじゃないからいい」

「気になるだろ」

俺はちよつと考えて、違うことを訊いてみることにした。

「クオ、お前、なんで恋愛映画嫌いなんだっけ？」

露骨にはあ？ という顔をされてしまった。多分「本当に大したことじゃないな」とでも思っているんだろう。

「だって退屈じゃないか」

「そんだけ？」

「なんかずーつとうだうだやってるだけだろ、あれ。俺には理解できない世界なんだよ」

まあ、俺もそんなに面白いとは思わないけど。

「初音さんは好きそうなのに」

「ミクはなく、基本的に、可愛いしいもんが好きなんだよ。動物が出てくる映画とかも好きだぜ、あいつ。そっちならまだ見てられるんだけど、恋愛映画は、俺はパス」

クオの言葉を聞きながら、俺は巡音さんのことを考えていた。喋

るのが苦手なだけだと思っていたけれど、何かもつと別の問題を抱えているのかもしれない。

……って、人のことをあれこれ詮索すんのもなあ。

「レン、どうしたんだ。またぼーっとして」

「ちよつと考え事」

「悩みがあるんだつたら聞かせ」

「悩みってほどじゃない。ところでクオ、お前、ガラスって言われて何連想する？」

「なんだよ、今度は連想クイズか？」

クオは思い切り呆れた顔になったが、一応返事はしてくれた。

「ガラス……ガラスねえ。窓だろ、コップだろ、電球だろ……ぱっと思いつくのはこんなところか」

「うーん……」

確かにどれもガラスでできてるが……。なんか違うよな。なんで気を失う前に巡音さん、ガラスって呟いていたんだらう？

「ガラスの靴」

クオは突然、そんなことを言い出した。思わず顔をあげる。

「……へ？」

「『シンデレラ』だよ。ミクなら絶対そう言うね」

ああ、あれか。アニメにもなってる有名なおとぎ話だ。それもなんか違うなあ……。そんな、ロマンチックな雰囲気じゃない。

じゃあ、ガラスってどういう意味だ？

「うーん、そうじゃないんだよな……」

考えたが、俺にはわからなかった。

凍るか、燃え上がるか（後書き）

自分で書いておいて言うのもなんですが、この学校の校医の先生は頼りにならないそうです。

ミクの奇立ち

月曜日、登校してきたわたしは、リンちゃんの席が空なのに気がついた。……いつも、わたしより早く来るのになあ。お手洗いでも行っているのかな。

自分の席に座って、わたしはぼんやりしていた。普段はリンちゃんとお喋りしている時間。ちょっと手もちぶさた。

結局、始業のベルが鳴る時間になっても、リンちゃんは来なかった。お休み？ 心配になったわたしは、昼休みにリンちゃんにメールを送った。ついでにクオに、お昼を一緒に食べないかもメールしておく。

リンちゃんからもクオからも、すぐに返事がきた。リンちゃんからは「一度登校したんだけど、貧血で倒れて早退したの。連絡しなくてごめんね」と。クオからは「いいぜ。中庭で待ってる」と。リンちゃんに「大丈夫？ 無理しちゃダメだからね」と返信してから、わたしは自分のお弁当と水筒を持って、中庭に向かった。

クオはもう来ていて、ベンチの一つに座っていた。わたしは手を振って、クオの方へと駆け寄り、隣に座った。

「今日は振られたのか？」

それが、クオの第一声だった。どういう意味？

「振られたって？」

「巡音さん。お前、いつも昼は一緒だろ」

どうしてクオはいつもいらないこと言うのかしら。

「クオ、振られたって言い方はないでしょ。リンちゃんはね、今日は学校休んでるの。具合が悪いんだって」

単なる体調不良ならいいけど……リンちゃんの話は、色々心配。プライバシーのこともあるし、クオに話すわけにはいかないけど。

クオは頷いて、お弁当箱を開けて箸をつけた。クオのお弁当箱、

いつ見ても大きいなあ。わたしのお弁当箱の倍くらいある。なんであんなに食べられるんだろう。

「具合が悪いつて、風邪か何か？」

「貧血だつて」

「それ、病気か？」

クオはそんなことを言い出した。わたしはクオの額を軽く叩いた。貧血を甘くみないでほしいわ。

「あのねえ、あれ、辛いんだからね」

「経験したことあるような口ぶりだな」

「わたしだつて、貧血になったことぐらいあるわよ
倒れるほどひどいのじゃなかったけど。」

「血の気多いの？」

「誰がよっ！」

「もう、クオつてば！ 女の子はね、色々と大変なの」

クオつて、どうしてこうデリカシーないのかしらね？ 困ったもんだわ。

この日は、クオは部活があつたので、わたしは先に帰った。演劇部の活動つて、結構長いよね。一人で待つていても退屈だし。

今日は家庭教師の先生が来ない日。……でも、宿題出てたな。先によつとこうつと。あ、わたしもクオも、家庭教師の先生に勉強を見てもらつてているの。やつぱり、学校の授業だけだと不十分だからね。一体一で教えてもらう方が、効率はいいし。

宿題を終わらせたけど、クオはまだ帰つて来ない。わたしは居間のテレビをつけて、音楽チャンネルにあわせた。あ、最近いいなと思つた人が出てるわ。

テレビを見てみると、クオが帰つてきた。

「あ、クオ、お帰り」

「おう、ただいま」

「ねえクオ、今ね……」

わたしは見ていた番組の内容について、クオに話し始めた。でも、そんなに話さないうちに、クオがわたしをさえぎった。

「ミク、ちよつといいか？」

「何？」

「お前、ガラスって言われて何を連想する？」

クオは、突然そんなことを訊いてきた。いきなりどうしたのかしら。うーん、ガラスねえ……。

「ガラスの靴！」

「やっぱこれでしょ。」

「それって『シンデレラ』だよな」

「決まってるじゃない」

他に何かあるというのよ。それにしても、クオったら、なんでいきなりこんなこと言い出したのかしら。……もしかして。

「ねえ、クオ。憶えてる？」

「もしかしてプレゼントの話？」

期待を込めてわたしはそう訊いてみた。でも、クオの返事は……。

「……なんでそうなるんだよ」

「……なんだ。しかも心底呆れた表情で。……何よそれは！」

「クオのバカ！」

わたしはそう叫んで、クオにクッションを投げつけた。ぼふつという音がする。そのままわたしは居間を飛び出すと、自分の部屋に駆け込んだ。部屋のドアを閉めると、机に駆け寄り、ジュエリーボックスを取り出す。わたしは箱の蓋を開けた。三段重ねのジュエリーボックスの、一番下の層の、区切られたスペース。そこに入っているものを取り出す。

金色のチェーンの先に、ガラスの靴が下がったペンダント。子供のお小遣いで買えるお値段のものだから、安っぽい。でも。

あれはわたしが小学生の時だった。ガラスの靴が欲しいって言うたら、クオがお土産屋さんで買ってきてくれたの。すごく嬉しくて、

ずっと大切にするって言った。

「……バカ」

なんで、くれた方は忘れてるのよ。言ってくれたらこれ見せて「
今でも大事に持ってるのよ」って、言おうって思ったのに。クオの
バカバカ！

ミクの奇立ち（後書き）

……これって、ミクとクオ、どっちに問題があるんだろう。

目覚める必要

「……何だこりゃ」

俺は思わず呟いていた。目の前にあるのは、巨大な茨の藪。そして、道はその茨の中に消えている。

「この先に行けっか？」

目の前の茨には、鋭い棘がびっしり生えている。こんなのに触ったら手がズタズタになりそうだし……そう思いながらも、俺は手で茨に触れてみた。……あれ。

茨はあっさりと崩れて消えた。なんなんだ、いったい。まあいい、先に行こう。進んだ先には、石を積み上げて作った建物があった。扉を開けて中に入る。がらんとした部屋の中には祭壇のようなものがあった、何かが乗っている。俺は祭壇に近づいた。

「……ガラスの棺？」

祭壇の上に乗っていたのは、透き通ったガラスの棺だった。当然中が透けて見える。棺の中には花が敷き詰められていて、誰かがその中に寝かされている。

「巡音さん？」

棺の中に入っていたのは、巡音さんだった。目を閉じて、全く動かない。これ……死んでるってこと？

俺は重い棺の蓋を持ち上げると、中の巡音さんを助け起こした。

あ、死んでるんじゃない。眠ってるだけみたいだ。

「巡音さん、起きて」

揺すってみたが、巡音さんは目を覚まさない。

「巡音さん、巡音さんってば」

……なんで起きないんだろう？俺は巡音さんを抱きかかえたまま、途方にくれた。あれ、ちょっと待て。このシチュエーションって、確か。

「……キスしろってことか!？」

昔話なんかでこういう話なかったっけ。お姫様が死人みたいに眠っていて、王子様がキスすると目を覚ますって奴。あれをやれっ
てか!？ いくらなんでも意識の無い女の子に勝手にキスできるか
っ!

「巡音さん、起きてくれ」

頬を軽く叩いてみたり、強く揺さぶってみたりするが、やっぱり
目を覚まさない。俺は額を押さえた。……やるしかないか。

「……ごめん」

一応詫びを入れておいてから もっとも、向こうは眠ってるん
だけど、俺は、巡音さんの唇に自分のそれを押し付けた。

唇を離してから、しばらくして。巡音さんが目を開けた。「キス
する」が正解だったのか……。巡音さんは、目を見開いてこっちを
じっと見ている。ざ、罪悪感が……。

「えーと……今のは起こすためにやったんであって、別に変な気を
起こしたわけじゃないから……その……」

「どうして……?」

うわ……今にも泣き出しそうだ。まずい。非常にまずい。

「いやだから、起こすためだってば」

「どうして、わたしを起こしたの? ずっと眠っていたかったのに」
「え?」

予想外のことを訊かれて、俺は返事に詰まった。

気がつくくと、目覚まし時計がやかましい音を立てて鳴り響いてい
た。……うるさい。起き上がって、目覚ましを止める。

あ……今のは夢だったのか。そりゃそうだよな。あれが現実だっ
たりしたら困るよ。しかし、何て夢だ。誰かに話したら笑われるの
は確実じゃないか。なんであんな夢、見たんだろう。

寝起きで半分ぼーとした頭のまま、俺は洗面所に行って顔を洗
った。……ちょっとはさっぱりしたな。居間に行くと、姉貴が朝食

を食べていた。

「おはよう」

「おはよう。……レン、昨夜夜更かしてもした？ 起きたばかりにしては疲れてるみたいだけど」

「なんか……夢見が悪くて……」

答えながら、俺は冷蔵庫を開けた。ハムが入ってる。ハムエッグでも作るか。ハムと卵を取り出し、フライパンを火にかける。

「夢ねえ……殺人鬼にでも追いかけられた？ それとも、誰か刺した？」

なんで姉貴の例えって殺伐としてるんだろう。そんなことを考えながら、俺はトースターに食パンを入れた。

「そういうのじゃないよ」

「じゃ、家が火事にでもなった？ あ、でも、火事の夢って縁起がいのよね、確か」

姉貴、その手の迷信は信じてないんじゃないかなかったっけ。

「違うって。別にいいだろ、夢の話なんて」

あんな夢、話せるかい。一ヶ月はネタにされるに決まってる。あ、卵が焼けた。皿に移す。トーストとハムエッグと牛乳の朝食を支度すると、俺は姉貴の差し向かいに座った。

「……あ、わかった」

「何が」

「レン、正直に答えなさい。エッチな夢見たんでしょ？」

牛乳を飲んでいた俺は、思い切りむせた。いきなり何言い出すんだよ、姉貴っ！

「うわ……その反応。凶星だったのね」

「違うよっ！」

キスはしたけど、断じてそういう夢じゃないってば！

「別に恥ずかしくはなくてもいいわよ。そのくらいの年齢だったら、むしろ当たり前だってば」

「だから違うって」

「あゝはいはい、そういうことにしておいてあげるわ」

姉貴はにやにや笑いながらそう言った。……完全に誤解されてるよ。全くもう。これ以上否定しても、姉貴は益々そうだと思うだけだろうな。話を変えよう。

「ところで姉貴」

「何？」

「眠ってるお姫様を王子様が起こす昔話って、何だったっけ」

小さい時に絵本かアニメであの手の話を見た記憶はあるんだが、タイトルが出てこない。姉貴は一応女だし、お姫様が出てくる昔話には、俺より詳しいだろう。

「何よ急に」

「いいから教えてくれよ」

「『眠り姫』？ それとも『白雪姫』？」

「そう訊き返してくる姉貴。二つもあるの？」

「どう違うんだっけ？」

「『眠り姫』は、出産のお祝いに招かれなかった妖精が怒って、お姫様が十五になった年に死ぬ呪いをかけるんだけど、別の妖精が呪いを弱めて、百年眠るだけにしてくれるの。十五の年に眠りについたお姫様は、茨に取り囲まれたお城で百年間眠り続けて、百年目に王子様がお城を訪れて、お姫様にキスすると呪いが解けて眠りから目覚めるのよ。」

『白雪姫』は、継母に美貌を疎まれたお姫様が捨てられて、七人の小人と一緒に暮らすんだけど、しつこい継母が白雪姫に毒の入ったリンゴを食べさせて殺そうとするの。でも白雪姫は死んだんじゃないって仮死状態になっただけで、ガラスの棺に入れて置いておかれてそこへ王子様を通りかかって、白雪姫を目覚めさせてあげるのね」

……混ざってるな、さっきの夢。茨とガラスの棺の両方がでてきたぞ。巡音さんが「ガラス」なんて言ったからだろうか。

「まあこれは有名なパターンで、更に細かいバージョン違いがあちこちに散らばっているんだけどね」。例えば『眠り姫』だと、グリ

△童話に収録されている『いばら姫』っていうのが一番有名で、今喋ったのがそう。ペロー童話の『眠れる森の美女』だと、前半はほとんど一緒なんだけど、えぐい後半が続いていたりするし」

「えぐい後半って？」

「ん〜確か、王子の母親がイカれてて、王子が留守にしている間に、お姫様と王子の間にできた子供やお姫様を食べようとするのよ」

「……なんだそりゃ。そんな危ない母親持って、王子大丈夫なのか？」

「血の繋がった孫を食うって……」

「料理人が気を利かせてかくまうから、実際に食べられはしないんだけどね。昔話って、結構子供を食べる話があるのよね。中には実の息子を両親が殺して食べる話もあるっていうし」

さらっと言わないでくれよ。

「それにしてもあんた、なんで朝から昔話のことなんか訊くのよ？」

「……いや別に。なんとなく」

「もしかして、夢に眠っているお姫様でもでてきたの？」

俺はもう一度、盛大に咳き込む羽目になった。

「あ……これまた凶星か」

「いやだから……」

否定しようとして、俺は「夢に眠っているお姫様がでてきた」は事実だということに思い当たった。お姫様っていうか、巡音さんだけ。そう言えば、夢の中ではドレスを着ていたような。

「ずいぶんとメルヘンな夢ねえ。で、あんたはお姫様が眠っているのをいいことに、着てるものを脱がせたわけか」

「……なんでそこまで話が飛躍するわけ？」

キスしかしてないってのに……。姉貴は俺のことをなんだと思ってるんだ。

「夢見が悪かった、って言ったってことは、あまりいい夢じゃなかったってことでしょ。だから、眠っているお姫様をみつけて、着てるものを脱がせて、いざ本番ってところで目が覚めちゃったのかなと」

微妙な年齢の弟の前で、そんな生々しい話は止めてくれ。

「違うって。っていうか、姉貴こそ、どうしてそういう発想になるんだよ。そっちこそ欲求不満なんじゃないの」

「実際にあるのよ。眠っているお姫様に王子様が襲いかかって、妊娠させちゃう昔話が」

昔の人の考えることはよくわからん。それじゃあ王子は犯罪者じゃないか。

「犯罪だろ、それ。どう考えても」

「そうしないとお姫様が起きないから仕方がないのよ。まゝ私も、こんな変態王子には、蹴りでも叩き込んでやりたいとは思っただけだね」

妊娠と目覚めにどういう因果関係があるんだ？ あ……そう言え

ば。
「お姫様は、起きなくちゃいけないわけ？」

夢の中で巡音さんは「ずっと眠っていたかった」と言っていた。現実の巡音さんにそう言われたわけじゃないけど、何だか引っこかかる。

「は？」

「ずっと眠っていたいとか思ったりしないのかな？」

俺がそう言うと、姉貴は呆れた表情になった。

「あのねえ。ずっと眠ってるってことは、何も見えないし、何も聞こえない。美味しいものだって食べられないし、すてきな人に出会って胸をときめかせることもないってこと。そんなの、死んでると同じよ」

死んでると同じ、か……。

「レン、ところで」

「何？」

「考え込むのもいいけど、あんた、時間は？」

いけね。姉貴との話に没頭していて、時間のことを忘れていた。

急がないといつも電車、逃がしちまう。俺は慌てて朝食の残りを

片付けると、席を立った。

目覚める必要（後書き）

めーちゃんのツッコミがいろんな意味で容赦無かつたような。

作中で言及している「王子様がお姫様に襲い掛かる」昔話は実際に存在します。こちらのサイトに掲載されている「太陽と月とタリリア」という話です。こんなのとくつついて幸せになれるんだろうか……？（そう思っちゃう昔話って、結構多かつたりするのですが）
<http://suwa3.web.fc2.com/enkan/minwa/sleeping/00.html>

このサイトには色々な昔話が掲載されていますが、これを見た感じだと「キスで目覚める」というパターンは意外と少なくて、実際のところは「眠らせている原因を取り除いてやる」と目が覚める、というパターンがほとんどなんですね。やっぱりアニメの影響が大きいらしいなあ。

雪の中で咲こうとする花

何とか電車には間に合い、遅刻もせずに済んだ。ああ良かったと思いつながら教室に入る。……あ。

巡音さん、今日は来ているんだ。自分の席で、今日も本を読んでいる。もう大丈夫なんだろうか。

「おはよう、巡音さん」

声をかけると、向こうは驚いた表情でこっちを見た。弾みでぱたんと本が机の上に落ちる。……ガルシンの短編集ね。

「……おはよう、鏡音君」

そう言つて、巡音さんは視線を落とした。否応無しに今朝の夢が思い出されるが、俺は必死でそれを頭から追い払った。夢の話なんかされても巡音さんが困るだろう。ましてやあの内容じゃ……。

「貧血は、もう大丈夫なの？」

「……ええ、もう平気」

相変わらず下を向いている。こっち向いてくれないかなあ。

「この前は……その……ごめんなさい」
謝られてしまった。

「あゝ、気にしてないからいいよ」

俺の方が、具合の悪かった巡音さんを追い詰めちゃったみたいだし。

「でも……」

巡音さんは困った表情で、そう呟いている。放つとくと堂々巡りになるな。ここは……あ、でも、そろそろ先生が来る時間だ。

「それより巡音さん、今日、時間空いてる？」

「え？」

「良かったら、放課後、ちょっと話せないかな」

今日は部活は無いから、俺の方は時間が取れる。こんな朝のあわただしい時間よりも、放課後の方が話がしやすそうだ。

「話すつて……何を？」

訊き返されてしまった。

「大したことじゃないんだけど、巡音さんに訊きたいことがあって」

「……わたしに？」

「そう」

俺は頷いた。巡音さんは、相変わらず困ったような表情で、落ち着きなく視線を動かしている。悩んでいるみたいだ。

しばらくして、巡音さんは、こう口にした。

「多分、大丈夫だと思う……」

「それ、いいつてこと？」

巡音さんは頷いた。えーっと、じゃ、後はどこで話すかだ。人がうろつろしているようなところだと、落ちついて話せないだろうし……。

「じゃあ、放課後、屋上に来てくれる？」

あそこだったらあんまり人は来ないはずだ。巡音さんが頷いたので、俺は自分の席へと戻った。

うちの学校の屋上は、何故か鍵がかかっていなかったりする。俺は一年の時、ふっと思いついて屋上へ続く階段を上がって、扉の取っ手を軽い気持ちで回したら、開いてしまったのでひどく驚いた。

それ以来、休みの時間なんかにたまに来てみたりするが、あれ以来、ずーっと開きっぱなしだ。無用心といえば無用心だが、俺がわざわざ注進することもないしな。なんでそんなこと知ってるんだとか、言われたら嫌だし。

もっとも、ほとんどの人は屋上というのは上がれないものだと思っっているらしく、ここはいつ来ても誰もいない。まあそんなわけで、巡音さんと話をする場所をここにしたんだ。

屋上に来てみると、巡音さんはまだ来ていなかった。さっき、教室内で初音さんと話していたっけ。もうちょっとしたら来るだろう。

俺は屋上のフェンスにもたれて、空を眺めた。いい天気だ。

そんなにしないうちに、扉が開く音がした。巡音さんだ。ちょっと辺りを見回してから、こっちにやってくる。

「鏡音君、話って、何？」

俺としては色々訊きたいことはあるんだが、どういう順番で話したもんかな……。一応考えといたはずなんだが、本人を前にすると出てこない。

「あ、えーと……」

俺は鞆を開けて、中から巡音さんが貸してくれた『ラ・ボエーム』のDVDを取り出した。

「まずはこれ、返しとくよ。どうもありがとう」

巡音さんはDVDを受け取ると、自分の鞆に入れている。うつむいているので、表情はよく見えない。

「あの……巡音さん、二日前のことなんだけど」

俺はやっぱり、気になっていることを訊いてみることにした。

「巡音さん、倒れる前に『ガラス』って言ってたけど、何のことだったの？」

巡音さんは顔を上げると、怪訝そうな表情になった。

「わたし……そんなこと言った？」

俺は巡音さんの顔を見た。とぼけているとか、嘘をついているわけじゃなさそうだ。

「少なくとも俺にはそう聞こえたけど」

巡音さんは考え込む表情になって、それから首を横に振った。

「ごめんなさい……憶えてないわ」

貧血でふらついていたりした時だから、憶えてなくても仕方がないかなあ。こだわった俺がバカみただけで、人間たまにはバカもやるさ。巡音さんは何か考えるような表情で、フェンス越しに外を見ている。

「ガラスって、透き通っているから外が見えるのよね。だから、ガラスの中に閉じ込められたら、すごく苦しいと思う。外は自由に見

えるのに、自分は動けないから」

不意に、巡音さんはそんなことを言い出した。一瞬、曇ってるガラスもあるよと言いそうになったが、俺は口をつぐんだ。今は、茶化していい時じゃない。

ガラスの中か……今朝の夢で、巡音さんはガラスの棺に入っていた。

「その状態だと、眠っている方が楽だと思う？」

巡音さんは、俺の言ったことに驚いたみたいだった。ちょっと唐突すぎたかなあ。

「……多分、ね。眠っていれば、外は見えないから」

「何も見えないし、何も感じないんじゃない？」

って、姉貴は言ってたよな。そしてそれは死んでいるのと同じだって。

「だから楽なのよ。見えるけれど動けないのとは違うから」

「でもそれだと、死んでいるのと一緒にじゃない？」

「言いたいことはわからなくもないが……」。

「……一緒にかも」

巡音さんは淡々とそう言った。表情も無表情に近い。

俺が言うのもなんだけど、起きた方がいいと思うぞ。眠りっぱなしより。

あ、でも……。

考えてみたら、初めて、まともに巡音さん自身の意見というものを聞いた気がする。

「ちょっとほっとした」

「……え？」

「巡音さんの考えてること、初めてちゃんと聞いたから」

何も考えてないわけじゃないんだ。

「どうして鏡音君がそんなことを気にするの？」

巡音さんの質問。どうして……なんだか、放っておけない気がするんだよ。でも、それをそのまま言うのもあれだしなあ。

「単なる好奇心だよ」

巡音さんは、また困ったような表情をしている。

「あ……それと」

俺は鞆から、もう一枚のDVDを取り出した。ミュージカル『R
ENT』のDVDだ。

「良かったら、これ、見てみない？ 残念ながら映画版だけど」

舞台版のDVDは出ていない（注）映画は曲が幾つかカットされたり、シーンが変更されたりしていて、話が多少わかりづらくなっているから、できれば舞台の方が良かったんだが……こればかりは仕方がない。

巡音さんはDVDを受け取って眺めている。

「これ……鏡音君がこの前聞いていた曲のミュージカル？ 『ラ・ボエーム』が原案の」

「そつだよ」

巡音さんはもう一度、DVDに視線を落とした。そのまま、何やら考え込んでいる。……あれ？ なんか、変な表情してるけど、どうしたんだろう。

「……巡音さん？」

俺が声をかけると、巡音さんははっとこつちを見た。……何だろう。何かに怯えているみたいに見えるけど……。興味ないけど、それを直接口に出したら俺が怒るとでも思ってるんだろうか。そこまです見狭く無いよ。

「こつこつものには興味ない？」

「そつじゃなくて……」

視線が動いている。言いにくいことがあるみたいだ。

「言いたいことあるならはっきり言ってくれていいよ」

巡音さんはまだしばらく迷っていたが、やがて、意を決したように口を開いた。

「あのね……わたしとしては、これ、とても見てみたいんだけど……」

……」

だから貸してあげるって。だが巡音さんが言い出したのは、意外なことだった。

「わたしの家……この手のもの、全部禁止なの……」
え？

「……全部って？」
思わず訊き返す。

「漫画とか、アニメとか、ゲームとか……最近の音楽とか……」
巡音さんは伏し目がちに、小さな声でそう言った。ちよっと待て。何だその滅茶苦茶な禁止令は。じゃあ、巡音さんは普段どうしてるんだ？

「えーっと……それ全部禁止なの？ 何か条件ついてるとかじゃないかって、最初から全部？」

一応確認。巡音さんは頷いた。……信じられない。

そりゃ俺だつて「勉強するまでゲームはだめ！」とか言われたことなら、数え切れないくらいある。でもそれはあくまで「勉強するまで」であつて、やることさえやっておけば、漫画を読むのもゲームをやるのも自由だ。そのものを禁止されることはさすがに無い。

「そういうものは、悪影響があるって……」
ゲーム脳がどうたら、とか変な理屈こねてる学者の本でも読んでるんだろつか。

「俺の本音を正直に言わせてもらつと、巡音さんの親って、厳しすぎるというか、むしろ変だと思つ」

あ、結構きつい調子になつてしまった。巡音さんが、視線を伏せてしまう。参つたな。傷つけてしまっただろつか。

「……やっぱりそう思つ？」
あれ。予想したのと違う反応が来たぞ。

「やっぱりって？」
「わたしも……その、変じゃないかとは思つてただけど……。ミクちゃんの家は、どれも禁止じゃないし……。あまり話したことないけど、他の人もそうみたいだし……。でも、ミクちゃんの家はミクち

やんの家だから……」

おどおどと巡音さんはそう言った。

「要するに、これが我が家ルールなんだからそれに従ってるって、そう、言われているわけ？」

訊いてみると、巡音さんはまた頷いた。道理でいつもクラシックばかり聞いてたり、固い本ばかり読んでたりするわけだ。クラシックが好きだから、文学作品が好きだから、ってわけじゃなくて、それしか駄目だからか。しかし、巡音さんの親つてのも、よくわからないな。巡音さんが今朝読んだの、ガルシンの短編集だったぞ。あの作家、確か精神病院に出入り入ったりを繰り返したあげく、三十ちよいで自殺してるんだが……。正直、精神が不安定な時に読む本じゃないと思う。

「そういうわけだから……わたし、これ、借りて帰るわけにはいかないの。もし見つかったら、鏡音君にも迷惑がかかるし」

巡音さんはそんなことを言い出した。

「迷惑って？」

「……わたしがまだ小さかった頃の話なんだけど、ミクちゃんに漫画を貸してもらったことがあるの。そうしたら、それが見つかって……お父さん、ひどく怒って。ミクちゃんの家電話をかけて……ひたすら苦情を……」

これは巡音さんにとっては思い出したくない思い出なのか、話すにつれて、どんどん声のトーンが下がっていった。ってちょっと待てよおい。そこまでやるのか、巡音さんの家。

「その時、巡音さんいくつだったの？」

「確か……小学校の一年生」

会ったことのない相手のことをどうこう言うのもなんだが、巡音さんの親つて、相当イカれているんじゃないだろうか。

しかしこうなると、これを貸すのは無理だな……。折角見たいって言うてくれたのに。うーん、何か打開策は……。

視聴覚教室には、再生機材があったな。でも、生徒だけじゃ使わ

せてもらえないだろうし……。初音さんの家は……。幾らなんでもこんなこと頼むのは、図々しすぎるよなあ。

「あのさ……。巡音さん。だったら、いつそ俺の家に来る？」

結局俺が出した結論はこれだった。幸い、我が家ならやかましいことを言う人はいない。……。姉貴にからかわれるかもしれないけど。「家って……」

こう言われたことがよほど意外だったのか、巡音さんは目を見開いている。

「だから、俺の家。友達連れてきてどうこう言われるような、うるさい家じゃないから。クオはよく遊びに来てよ」

ここで俺は一つ、問題点に気づいた。俺の家には親がない。つまり、下手をすると俺の家で、俺と巡音さんが二人つきりになってしまうわけ……。

……。姉貴に頼んで、当日は家にいてもらおう。留守中に女の子と二人つきり、なんてことが後でバレたら、色々とややこしいことになる。やましいことが何もなかったにしても。痛くもない腹を探られるのはごめんだ。

巡音さんは考え込んでしまった。せかしてもしょうがなさそうなので、俺は巡音さんが結論を出すのを、黙って待つことにした。……断られるかもしれないな。それはそれで仕方がないか。

しばらくして、巡音さんが顔をあげた。結論が出たらしい。

「……。本当に行つていいの？」

えーっと、これは、OKってことだよな。

「来るってこと？」

巡音さんはおずおずと頷いた。

「……。日曜なら、なんとか、家を抜け出せると思つから……」

日曜ね。姉貴に確認取つとかないと。

「鏡音君の家って、どこにあるの？」

俺は手帳を取り出して、自宅の住所と最寄駅、電話番号、それから俺の携帯の番号とメールアドレスを書いた。それからそのページ

を破って、巡音さんに渡す。

「俺の家、ちょっとわかりにくいところにあるから、駅に着いたら電話して。迎えに行くから」

「……………ありがとう」

「ついでに巡音さんの携帯の番号とアドレスも教えてもらえる？もしうちの不都合があったら、連絡しないといけないから」

そう言つと、巡音さんはまた困った表情になった。えーと、もしやこれって……………。

「あの……………教えるのはいいけど、なるべくかけないでもらえる？」

「どうして？」

想像はついたが、一応訊いてみる。

「お父さん、わたしの携帯を調べることがあるから……………見慣れないアドレスがあったら、多分問い詰めると思うの」

巡音さんの親は、娘の一挙手一投足を監視してないと気が済まないんだろうか……………。どんな親だよ。

「だから、教えてくれたのは嬉しいけれど、わたしの方から携帯とかにかけることは、多分ないと思うの……………ごめんなさい」

いや、巡音さんが謝ることじゃないと思う。

巡音さんが自分の携帯番号とメールアドレスを紙に書いて渡してくれた。そんな事情があるんじゃないかけることはあまりなさそうだけど、一応自分の携帯に登録しておこう。

「それじゃあ、日曜日」

「ええ……………ありがとう」

そうして、俺は巡音さんと別れて帰宅した。

(注) 『RENT』は、現在、舞台版のDVDが発売されています。ですが、話の都合上、この作品の時間軸を「舞台版のDVDが発売される前」ということにしています。

雪の中で咲こうとする花（後書き）

都合は……大したことじゃないんですが、舞台版のDVDが発売されるちょっと前に、オペラ映画の『ラ・ボエーム』が公開されているんですよ。DVDを貸してもらわなくても、これを見に行けばいいじゃん！ となってしまうので、この話の時間軸は「映画版『RENT』公開後」→「映画版『ラ・ボエーム』公開前」ということになっています。

この次はレンの家訪問記になるわけですが……話の構想のまとめ方で少々悩み中です。それに長くなりそう……。更に章タイトルが浮かばない……と、考えなくてはならないことが多いのです。与太話ですみません。

来て一緒に歩こう

巡音さんと話をしたその日の夜、俺は姉貴に日曜の予定について訊いてみた。

「日曜？ 出かける用事も無いし、家にいるつもりだけど」

それが、姉貴の返事だった。

「じゃ、その日は家にいるんだ。俺、日曜に学校の友達を家に呼ぼうと思ってる」

「邪魔だから出かけててほしいってこと？」

「逆。家に来てくれ」

俺がそう言うと、姉貴は怪訝そうな表情になった。

「私がない方が、気楽でいいんじゃないの？」

呼ぶのがクオナならね。でも、巡音さんだもんなあ。

「その子、女の子だから。俺と二人つきりはまずいよ」

「女の子かあ。確かに二人きりは、まずいわね。……もしかして、新しい彼女？」

姉貴はそんなことを言ってきた。なんですぐそういう発想になるんだよ。

「……ただの友達だよ。一緒に『RENT』を見ようって話になって」

姉貴は、今度は呆れた表情になった。

「要するに布教活動の一環ってこと？」

布教って……もうちょっと言葉はないんだろうか。

「『ラ・ボエーム』を貸してくれた子なんだよ。『RENT』を見せるのはそのお礼。とにかくっ！ そういうわけだから、日曜は家にいてくれよ」

「いいわよ。どうせ家にいる予定だったし」

姉貴のにやにや笑いが気になったが、俺はそこで話を切り上げた。下手すると質問責めにされそうだったし。

って、どのみち、日曜に巡音さんが来たら、やっぱり質問責めにされるんだろうなあ……仕方ないか。

日曜日。電話を受けて駅へ出向くと、巡音さんは見るからに緊張した様子で俺を待っていた。何もそんなに……と思ったが、この前聞いた話からすると、ろくに外に出たこともないのかもしれない。

「巡音さん」

声をかけると、向こうはほっとした様子だった。

「あ……鏡音君」

「大丈夫だった？」

「……なんとか。親に嘘ついちゃったけど」

巡音さんはそう言っつて、視線を落とした。……嘘つかないと出てこないわけか。

「俺の家、こつちだから。ついてきて」

俺は巡音さんを連れて、自分の家に向かった。距離はそんなに無いんだけど、ちょっと道がややこしい。巡音さんの話を聞く限り、一人で歩かせたら迷子になるのはほぼ確実だろう。

ちゃんと後を着いて来てくれるかを確認しながら、道を歩く。まだ緊張しているのか、周りを見ている余裕もないみたいだ。

「着いたよ」

鍵を開けると、俺は巡音さんが中に入れるよう、ドアを支えた。

巡音さんが、「お邪魔します」と言っつて、家の中に入る。続いて俺も入り、鍵をかける。

「姉貴、帰つたよ!」

奥に向かつてそう呼ぶと、姉貴が出てきた。

「レン、お帰り。そちらがお友達？」

他の人がいると、姉貴、普段と言葉遣いが微妙に違つんだよな。

「そつだよ」

「初めまして、レンの姉のメイコです」

姉貴はそう言っ頭を下げた。

「は……初めまして。巡音リンです。鏡音君とは同じクラスです」
思い切り緊張した声でそう言っ、巡音さんが姉貴に頭を下げて
いる。

「……巡音？」

姉貴、え？ とも言いたげだな。どうしたんだ。

「そうです……どうかしましたか？」

「昔の知り合いに同じ名字の人がいたから……もしかして、親戚か
何か？ 巡音ハクっ、いうんだけど……」

今度は巡音さんの方が驚いた表情になった。

「姉をご存知なんですか？」

へっ？ 今、巡音さん、姉っ言ったよな。姉貴、巡音さんのお
姉さんを知ったわけ？ 凄い偶然だ。

「え、姉っことは、あなた、ハクちゃんの妹なの？」

「あ……はい」

「やだ、嘘、信じられない。世間っ狭いのねえ。まさか弟が、ハ
クちゃんの妹と同じクラスとは」

なんか妙に一人だけで盛り上がってるな。巡音さんは微妙に引い
てる。姉貴に怯えてるんじゃないといいけど。

「姉貴、巡音さんのお姉さんを知ったの？」

「高校の時の部活の後輩なのよ。卒業してからずっ会ってないん
だけど。懐かしいな。ハクちゃんはどう？ 元気にしてる？」

へーえ。姉貴は高校時代、バドミントン部だった。てことは、巡
音さんのお姉さんもバドミントンやっったのか。

っ、あれ？ 巡音さん引きってる。

「あ……えーと、その……」

どうやら、訊かれたくないことだったらしい。困ってるぞ。

「姉貴、お客さんを玄関に立たせっぱなしにしとくの？」

俺がそう言っ、姉貴ははっとした表情になった。

「ああ、ごめんごめん。さ、あがってちょうだい」

姉貴が脇にどいたので、巡音さんはもう一度「お邪魔します」と言って、靴を脱いだ。あがってから、その靴をちゃんと揃えている。「俺たちは予定どおり『RENT』を見るから、姉貴、邪魔しないでくれよ」

「はいはい、わかったわ。じゃ、私は自分の部屋にいるから、用があつたら呼んでちょうだい。それと、お客さんには失礼のないようにね」

姉貴はそう言うと、二階へと上がっていった。あゝ、毎度のことながら疲れる姉貴だ。なんでいつも一言多いんだよ。

「巡音さん、こっち」

俺は巡音さんを連れて、テレビの置いてある居間へと入った。

「適当に座ってて。今、お茶を淹れるから」

巡音さんが座つたのを確認して、俺はお茶を淹れに台所へと向かった。

「緑茶でいい？」

「あ……うん」

普段あまり使わない来客用の急須と茶碗を取り出して、お茶を淹れる。お茶の入った茶碗を盆に乗せて、俺は居間へと戻った。

戻ってみると、巡音さんは、居間のサイドボードの上の家族写真を見ていた。俺が小学校の時に撮った奴。……家族全員が揃っている、最後の写真だ。

「どうぞ」

俺はそう言って、巡音さんの前にお茶を置いた。

「……ありがとう」

写真をまだ気にしてるみたいだ。何か引っかかることでもあるんだろうか。

「俺と姉貴と両親と、前に飼ってた犬。確か、旅行に出かけた先で撮ってもらったんだ」

「犬を飼ってたの？」

「ああ。去年死んじゃったけど」

あれ以来、犬を飼う気が起きない。

「巡音さんとは、ペットとかは？」

訊いてみると、巡音さんは暗い表情で首を横に振った。……ペツトも禁止かよ。

「あの……そう言えば、鏡音君のお父さんとお母さんは？ 家にいないの？」

あ、そっぴや巡音さんに、うちの事情を説明してなかった。今日は日曜だから、普通の家なら両親がいるよな。

「……うち、今、どっちもないんだよ。あの写真を撮ったちよつと後に、父親が交通事故で亡くなって……」

俺の言葉に巡音さんがショックを受けた表情になる。いや、そんな構えなくても……ハードな話だから仕方ないか。俺も吹っ切るまでかなりかかったし。

「……それは……その……ごめんなさい。わたし、そんなことだとは思わなくて……」

巡音さんはうつむいて、聞き取れないぐらいの小さな声でそう言った。

「あんまり気にしないでくれ。実は……構えられるとこっちが辛くて。で、話戻すけど、そういうわけで、俺のところは母子家庭なんだ。で、母親の方は、去年から仕事で海外に行つてて、この家は実質上、俺と姉貴の二人暮らし。あ、夏と冬の休みの期間には、母さんも戻ってくるけど」

巡音さんは黙ってしまった。……空気が重い。気分を変えよう。湿っぽいのは苦手だ。

「この話はここまでにして、『RENT』を見ようか」

来て一緒に歩こう(後書き)

ルカ二十四、めーちゃん二十三、ハク二十一という年齢設定です。
(めーちゃんとルカさんはバーズデーがまだ来ていないので実際にはもう一つずつ下です) あれ、ハクって誕生日設定あるんですけど……。

あるのはただ、今日という日

『RENT』が始まると、巡音さんは真剣な表情で、画面に見入っていた。実を言うところとちよつとばかり、巡音さんには刺激が強すぎるんじゃないかなあと心配していたんだが 何せドラッグやエイズや同性愛が題材の作品だ 杞憂だったらしい。

『RENT』が終了した後、巡音さんは黙って画面を見ていた。集中しすぎて気が抜けたらしい。……こういう時は、そつとしておこう。俺は立ち上がって、お茶のお代わりを淹れに行くことにした。……全部最初にこつちに持ってきておけば良かったかなあ。今更そんなことを考えても仕方ないか。俺は急須にお湯を入れて、居間へと戻った。

新しくお茶を入れた茶碗を目の前に置くと、巡音さんははつとした表情になって、こつちを見た。

「……ありがとう」

「どういたしまして。で、どうだった？ 『RENT』」

訊いてみると、巡音さんは考え込む表情になった。

「その……すごく、力強い作品なのね」

あ、巡音さんもそう思ったんだ。

「そう思う？」

「ええ」

『RENT』は、エネルギーに満ちた作品だと、俺は思う。ラーソンの最初の大掛かりな作品だから、ラーソンはこの作品に、ありつたけのエネルギーを詰め込んだんだろう。そのせいで、寿命が縮まったのかもしれないけど。

「『ラ・ボエーム』とは、同じようで全然違うから、ちよつと驚いたけど」

確かにそうとも言えるなあ。話の流れは基本的に一緒なんだけれど。

「『ラ・ボエーム』は恋愛だけに話を集中させていた感じがするけど、『RENT』では、生きていくことに焦点が当たってるから」
俺がそう言うと、巡音さんはまた考え込む表情になった。

「でも、今日だけをみつめて生きて行くっていうのは、何だか悲しい感じがするわ」

「そうかな？」

それだけ、ラーソンが生きていくことに前向きだったんだと思うけど。

「だって、過去も未来も見なくて、ただ、ここにある今だけを見つめて生きるんでしょう？　そうやって刹那の生に意識を集中させてしまえば、過去のこと未来のことも、思い煩うことはないわ。でも、そうしないと生きていけないっていう、その事実自体が辛い気がするの。そうやって結局、日々は過ぎて行くんだもの。積み重なってできた過去という時間を、全部見ないようにしちゃっていいの？　無かったことにできるの？　その人を形作るのが、過去なんじゃない？　それを忘れて生きられるものなの？　未来だってそうよ。見ないようにしたって、いつかは来てしまうわ」

巡音さんがこんなに喋ったのって初めて聞いた気がする。……それはさておき、俺は、巡音さんに言われたことを考えてみた。言いたいことはわからなくもないが……。

「確かにそういう側面もあるんだろうけど……ロジャーもミミもエイズだし、ああいう『死が目の前にぶら下がっている』状態だと、それこそ、今、巡音さんが言ったように、その日一日一日だけに、意識を集中させていかないと辛いのかも」

自分の人生が終わる音が、聞こえてくるようなもんだろうし。でも、それだけじゃあないと思う。

「でも、ラーソン　あ、このミュージカルを作った人なんだけどが考えていたことは、それだけじゃあないと思うな。このフレーズは最初、部屋に閉じこもっているロジャーをミミが誘いに来るシーンで使われるし、『悔やんでばかりだと人生を逃す』という歌

詞にもあるとおり、過ぎた時間に囚われないことを訴えたかったんじゃないのかな」

そう言うと、巡音さんはまた考え込んだ。それからしばらくして、巡音さんはぽつんとこう言った。

「ロドルフォは、結局、見たくなかったのよね」

「何を？」

「ミミがもうすぐ死ぬっていう現実。ロジャーも、きっとそう。自分もミミも、そんなにしないうちに死んでしまう。だからロドルフォは第三幕でミミと別れるし、春が来るのに別れるなんて、変なもの。ロジャーはギターを売ってサンタフェに引越すんだわ」
『ラ・ボエーム』のロドルフォは、ミミを想いながらも探そうとはしない。一方、『RENT』では、ロジャーはミミこそが探し求めていた存在だと気づき、ニューヨークに帰ってきてミミを探す。

ロドルフォは最後まで現実を見なかったけれど、ロジャーは現実に向き合ったんだ。だから、一度握ったミミの手を離そうとしないロジャーに対し、ロドルフォはミミが死んでしまったことに気づかない。

じゃあ、最後にミミが死なないのは、現実に向き合ったロジャーの為に、ラーソンが用意したハッピーエンドってことか？ そう考えると、つじつまがあうような気がする。

……こうやって、一つの あ、この場合二つか 作品について、意見を交換しあえるのっていいな。

俺がそんなことを考えていると、階段を下りてくる足音が聞こえてきた。……姉貴だな。邪魔はしないんじゃないかな。よかった。

「ちょっといい？」

部屋のドアを開ける前に、外からそう訊いてくる辺り、気は使ってくれているらしい。

「いいよ」

俺がそう言うと、姉貴は居間に入ってきた。

「姉貴、何か用？」

「あんたたち、お昼はどうするつもりなのかって訊きに来たのよ」
言われて俺は時計を見た。そういやもう十二時を回ってしまっ
ている。

「何、姉貴、作ってくれるとでもいうわけ？」

「……あんたねえ。まあ、そのつもりで下りて来たんだけどね。ス
パゲッティでいい？」

「作ってくれるんなら、なんでも」

この際、贅沢は言えない。

「巡音さんもそれでいい？ 姉貴の飯、一応それなりに食えるから」

「あのねえ……それが、作ってもらう側の言う台詞？」

呆れた声で姉貴がそう言ってくる。だって姉貴の料理って、下手
すると野菜ばかりどころかーっと入ってるし。姉貴の主張するところ
によると「あんたが作ると動物性タンパク質ばかりになるから、
こうやってバランスを取ってるの！」だそうだが……。

「あ……わたし、自分の分はお弁当持ってきたんですけど……」

おずおずと巡音さんが割って入った。

「お弁当？ そういやハクちゃんのお弁当は、いつも手が込んでた
わね……」

姉貴は唐突に回想モードになった。えーと、参ったな。巡音さん
は、お姉さんの話はあるにすぎないみたいなんだが……姉貴、
察してくれよ。よくわからないけど、何か洒落にならない状況かも
しれないんだから。

「でも折角来たんだから、少しは食べて行ってちょうだい」

「あ……はい」

姉貴は台所に行ってしまった。巡音さんは見るからにほっとした
様子。やっぱり、お姉さんのことは話したくないらしい。

「巡音さん、ちょっと待ってて」

俺は立ち上がると、姉貴の後を追って台所に行き、境の戸を閉め
た。姉貴は、ちょうどお湯を沸かしているところだった。当然、換
気扇がついている。……これなら、多分巡音さんには聞こえないな。

「姉貴」

「何？ 忙しいんだけど」

言いながら、姉貴は冷蔵庫からキャベツを取り出した。

「キャベツか。キャベツならいいけど、ブロッコリーはやめてくれ」

「あんた、わざわざそんなこと言いに来たの？」

あ……いけね。こんなこと言いに来たんじゃなかった。

「いや違う。今のはついで。巡音さんのお姉さんのことだけど、なんか話したくない事情があるみたいだから、あんまり詮索しないであげてくれる？」

一応、声を潜めて俺はそう言った。

「レンもそう思う？ どうも、何かあるみたいよね」

なんだよ、気づいてたのかよ。

「気づいていたんなら、唐突にお弁当のこと持ち出さなくてもいいじゃないか」

「あれは口が滑った……というか、別のこと言いかけたのよ。でも、それは訊くともっとまずいことになりそうだったから、咄嗟に違うことを言おうとして、そうしたら口から出てきたのが、さっきのだったの」

キャベツをざくざく刻みながら、そんなことを言う姉貴。それにしたって、もうちょっとどうにかならなかったんだろうか。

「しまったと思ったから、すぐに話を打ち切っただけ。とにかく、わかったから、もう戻りなさい。お客さんを一人にしておくもんじゃないわ」

へいへいと答えて、俺は居間に戻った。巡音さんがこっちを見ている。

「とりあえずブロッコリーを入れるのは阻止した」

俺がそう言つと、巡音さんは首を傾げた。

「嫌いななの？」

「ああ」

正直、どこが美味しいのかよくわからん。何故か姉貴は好きなん

だよな……。

「緑黄色野菜は身体に良いはずだけど」

「姉貴と同じようなこと言わないでくれよ。不味いもんは不味い」

一度料理にあれがでかいまま大量に入っていた時は、さすがに箸をつけるの躊躇ったぞ。姉貴がうるさいからなんとか食ったけど。

「パン粉とチーズをかけて、オーブンで焼くと美味しいと思うけど」

「絶対にパス！ それ、姉貴に言わないでくれよ。聞いたら試すから」

「そんなに嫌わなくてもいいのに」

呆れられてしまった。

「巡音さんだって、食べられないものの一つ二つぐらいあるだろ」

「それは、あるけど……」

「それと一緒に。ちなみに、嫌いなものって何？」

「納豆とか…… オクラとか……」

どうもネバネバ系が苦手らしい。オクラは俺もパスかなあ。姉貴が「雑誌に載っていた料理を試してみた」と言っただけで、オクラとトマトにスパイスをどっさり入れて煮込んだ料理を作った時は、何の嫌がらせかと思っただけ。

「オクラは俺も苦手だけど、納豆は好き」

あ、固まってる。よほど嫌いらしい。納豆は美味しいと思うんだが、嫌いな人って多いよな。

「そんなに真面目な顔して考え込まなくてもいいってば」

それからしばらく、俺たちは食べ物に関する話をした。

「レン、こっち来て」

台所から、姉貴が呼ぶ声がする。どーせ支度を手伝えとか言うんだろうな。しょうがないか。

「ちよつと行ってくる」

立ち上がって台所に向かう。スパゲッティは茹で上がったようであるの中で湯気を立てていた。

「何？」

「後ちよつとだから、テーブル拭いといて」

姉貴が台拭きを投げてよこしたので、受け止める。姉貴、この癖直らないなあ。行儀悪いって言われてんのに。

「で、それが終わったらフォーク出しといて。後、飲み物のことだけど」

「俺は何でも」

「あんたじゃなくて、リンちゃんの話よ。あんたはどうせコーヒーでしょうが。とりあえず選択肢は緑茶、紅茶、コーヒーだから」

……はあ。……リンちゃんね。

「訊いてくる」

俺は居間に戻った。まずはテーブル拭きか……。でもって、飲み物の話ね。

「巡音さん、緑茶と紅茶とコーヒーと、どれにする？」

「あ……じゃあ、紅茶を……」

「紅茶ね」

台所に行って、紅茶だと言う。姉貴に渡されたフォークをつかみ、俺はもう一度居間へと戻った。そんなにしないうちに、姉貴が「お待たせ」と言っ、スパゲッティを盛った皿を乗せた盆を手に、居間にやってくる。

「はいどうぞ。飲み物を取ってくるから、ちよつと待っててね」

皿をテーブルに並べた後、姉貴はそんなことを言っ、また台所に戻って行った。……キャベツとベーコンか。まともな組み合わせで良かった。

巡音さんは鞆からお弁当箱を取り出して、テーブルの上に置いている。

「はい、リンちゃんは紅茶ね。」

姉貴が戻ってきた。巡音さんの前に紅茶の入ったカップを置く。

俺と姉貴はコーヒーだ。姉貴の分にはミルクが入っている。

「あ、それがお弁当？」

「ええ」

「見てもいい？」

姉貴、幾らなんでも図々しくないか？

「……………どうぞ」

巡音さん……………別にOKしなくてもいいと思うぞ。びしっと断つちやっても。とはいえ巡音さんが承諾しちゃったので、姉貴はお弁当箱を開け始めた。

「わ……………美味しそう」

姉貴がそんなコメントを発したので、俺はお弁当箱の中身に視線を向けた。小さめのお弁当箱の中に、お握りや色んなおかずが詰め込まれている。……………確かに美味しそうだな。

「他所のお弁当見るのってなんというか、新鮮よね」

……………そういうもんか？ 俺には姉貴の考えていることがよくわからん。

「あの……………良かったら、少し食べます？ これ、全部はちょっとさすがに多くて……………」

巡音さんはそんなことを言い出した。

「そんなこと言うとうちの姉貴、図に乗るよ」

「なんてこと言うのよあんたはっ！」

姉貴にはたかれた。いや、はたかれたつつても、軽くだけど。

「あの……………本当に、食べてくれた方が助かるから。お弁当を残して帰ると、心配されちゃうし……………」

「リンちゃんもこう言ってくれていることだし。シェアしましょうか。取り皿持ってくるわね」

「だからさあ、姉貴……………」

俺の言うことを最後まで聞かずに、姉貴は台所へと行ってしまった。……………ああもう。

「巡音さんとこ、残すとつるさいの？」

「つるさいというか……………この前貧血で倒れたから、お母さんがちょっと過敏になってるの」

そういうことか。それは確かに心配するのも仕方ないかなあ。俺

も目の前で倒れられた時はびっくりしたし。

「鏡音君のお姉さんが作ってくれたパスタ、結構量があるし、これを食べるとお弁当を全部食べるのは無理だから。食べてもらった方がわたしも助かるの」

確かに「少し」なんて言っていた割には結構量があるな。姉貴、これを見越して最初から普通の量に盛ったんだっけたりして。……結構ずさんなところがあるから、深い意味はないのかもしれないけど。そんなことを考えているところへ、取り皿を手に姉貴が戻ってきた。

「じゃ、食べましょうか」

とりあえずぐだぐだ考えるのは止めにして、飯に集中しよう。腹減った。

あるのはただ、今日という日（後書き）

めーちゃんとしては栄養バランスを考えながら料理を作るわけですが、レンには全然伝わってなかったりします。まあ、この年頃の男の子なんてそんなもんです

悲劇か喜劇か

巡音さんのお弁当箱の中身を、結局俺も分けてもらったが、確かに美味しかった。姉貴が「美味しい」を連発したので、俺は何も言えなかったけど。巡音さんのところって、運転手さんがいるぐらいだから、料理も専門の人がいるのかもな。ああいう生活は、俺には想像がつかない。今度クオに訊いてみるか。

食事が終わると、姉貴は空になった皿を下げに行った

「鏡音君のお姉さんって、いつもあんなに賑やかなの？」

巡音さんがおずおずと訊いてきた。

「姉貴？ まあね。大体いつも、うるさいくらいよく喋るよ」

それに詮索も好きだったりするし……。今日はお客さん　それも、後輩の妹　が来ているということ、ちょっとは自重してくれているみたいだけど。

そこへ、飲み物のお代わりを持って、姉貴が戻って来た。……やべ。今言ったこと、聞かれてないよな。

「はい、どうぞ」

「……ありがとうございます」

どうやら、聞かれてはいなかったらしい。助かった。俺はほっとして、姉貴が持ってきてくれたお代わりのコーヒーを一口飲んだ。

「ねえ、リンちゃんって、今の学校は、中学と高校、どっちから？」

何故か、姉貴は巡音さんにそんなことを訊き始めた。……何だよいきなり。そういや、うちの学校って中等部もあるんだよな。俺は高等部からだから、あんまり気にしたことなかったけど。

巡音さんは、多分中等部からだろうなあ。クオが前、初音さんは中等部からみたいなこと、言ってたし。

「中学からです」

あ、やっぱり。

「ふーん、知ってるだろうけど、レンは高校からなのよ。編入と持

ち上がりって、何か違いとかあったりする？」

姉貴は、今度はそんなことを訊き始めた。我が姉貴ながら、何がしたいんだ一体。巡音さんと言うと、姉貴の質問に首を傾げている。

「ちょっとわかりません……」

そりゃ、確かに答えづらいよな。俺だって、こんなこと訊かれても返事しづらいよ。強いて言うなら、一年次は持ち上がり組と編入組は、違うクラスになるってことぐらいか。

「中にいるとわからないものかしらね」

姉貴はそんなことを言っている。

「姉貴、何だってそんなことを訊くわけ？」

「ただの好奇心よ」

そうか？ そうは思えないんだが……。

「あんまり質問責めになると、巡音さんが困るだろ」

「リンちゃん、困ってる？」

「え……いいえ」

ふるふると首を横に振る巡音さん。姉貴が胸を張る。

「ほーら、こう言ってるじゃない」

「それは、巡音さんが姉貴に対して気を使ってるんだってば。……」

巡音さん、姉貴に訊きたいことあるんだったらなんでも訊いていいよ。巡音さんばかり答えるのは、フェアじゃないから」

さすがにちよつといらつと来たので、俺はこう言ってみた。あ、でも、巡音さんの性格だと、姉貴を質問責めにするのは無理かな……。

俺にこう言われた巡音さんの方かというと、例によって考え込んでいる。

「あの……」

しばらくして結論が出たのか、例によって巡音さんはおずおずと切り出した。

「うん、何？ スリーサイズと体重以外だったら何でも訊いていい

わよ」

姉貴の方は余裕たっぷりだ。そんなこと巡音さんが訊くわけない
だろ。

……うーん、彼氏はいますか？ とか、訊いてくれると面白いん
だけど。訊かないだろうなあ。

ところが、巡音さんが口にしたのは、違う意味で意外なことだっ
た。

「……鏡音君から聞いたんですけど。お姉さんが、『ラ・ボエーム
のロドルフォのことを、ヘタレだって言っていたって。それで……」
「ちよつとあんた、リンちゃんになんてこと言ったの!？」

巡音さんを途中でさえぎり、姉貴は俺にそう怒鳴った。いや……。
話のネタにちよつどよかったから、つい……」

「ついじゃないわよついじゃ！ 何考えてるの!？」

「だって本当のことだろ。姉貴が酔っ払ったあげく、ロドルフォを
ヘタレの甲斐性なして怒鳴りまくったのも、脚本にケチつけまく
ったのも」

「だからってハクちゃんの妹にそんなこと、言わなくてもいいでし
ようがつ!」

「その時は、巡音さんのお姉さんが姉貴の後輩だなんて知らなかつ
たんだよつ! わかるかそんなことつ!」

ここまでやりあったところで、俺と姉貴は、巡音さんが引きつっ
た様子でこつちを見ているのに気づいた。どう見ても怯えている。

……まずい。

「あ……えーと、その……」

「ああ、気にしないでリンちゃん。定例の姉弟喧嘩だから」

違うだろ。内心でそう突っ込みたいのを、必死でこらえる。そり
ゃ、この程度の言い争い、よくあるけど。

「で……『ラ・ボエーム』の話ね。確かに言ったし、今でもそう思
うわよ。あの主人公はどうしようもないヘタレの甲斐性なしだつて
だつて、生活力は無いし、つまらない理由で恋人を捨てるし　く

だらないこと画策してる暇があるんなら、バイトして薬代の一つでも作ればいいのよ。最後の時は恋人の手すら握ってあげられないんじゃないわ。へタレとしか言いようがないわ」

姉貴は開き直ったのか、そんなことを言い出した。……巡音さんは、まだ微妙に引いている。

「あの……すみません……」

「ああ、リンちゃんに怒ってるわけじゃないから、そんなに構えないで。怒ってるのはあの主人公に対してだから」

言いながら俺を横目で睨む姉貴。はいはい、俺にも怒ってるって暗に言いたいんだろ。

「……えっと……」

「何?」

「そういうこと言うのって……怖くないんですか」

巡音さんは、こんどは妙なことを訊いてきた。姉貴がきよとんとした表情になる。

「怖いって、何が?」

「その……プッチーニって、もともとイタリアオペラを代表する作曲家ですし、その中でも『ラ・ボエーム』は、彼の代表作で、最高傑作だつて言う人もいるし、『泣けるオペラ』と評判だつたりするし……」

「え、あれって『泣ける作品』だったの」

姉貴、身も蓋も無いな。それにしても『ラ・ボエーム』って、泣ける作品って扱いなのか。そういう感じはあまり受けなかったが……。あ、でも、『RENT』を劇場に見に行った時は、劇場で泣いている人が結構いたから、『ラ・ボエーム』も発表当時は泣いてしまふ人がそれなりにいたのかも。

「一応そのはずです……」

「うーん、でも、あれじゃ泣けないわねえ。何せ主人公がボンクラすぎるし」

本当に容赦ないな。

「泣けるとか何とか云々以前に、姉貴その手の作品じゃ泣かないだろ。人を死なせて泣かせのシーンを作るのはあざとって、しょっちゅう言ってるじゃん」

高校時代、『ある愛の詩』を授業で見る羽目になって、すごく疲れたとか言っていたし。

「レンは黙ってて。あんたが口挟むと話がわき道に行くから」

姉貴は俺を肘で小突いた。

「で、リンちゃんは何が気になっているの？」

「あの……だから……高い評価を受けている作品に対して、そういうことを言っちゃっていいのかって……」

「そう言われてもねえ……実際に見ていてしらけちゃったわけだし。その、プッチーニって人には悪いんだけど、もうちょっと話の組み立て方を考えてほしいわ」

あ、それは俺も同意かも。なんとというか、話の展開が全体的に唐突すぎて、見ていてそれはないだろうって思えるところが結構あった。『RENT』を先に見ていたのあるだろうけど。ラーソンは後発だから、問題点がわかってそこを修正していったんだろうなあ。

……その割に、名作映画のリメイクってのは駄作ばかりだよな。なんでだろ。

「そうねえ……じゃ、ちょっと訊くけど、リンちゃんはあれ見て泣いたの？」

「……いいえ」

巡音さんは首を横に振った。

「結局、そこに帰結していくと私は思うのよね。例え世界中の九十パーセントの人が認めた名作だって、あわない時はあわないんだし。リンちゃんがその作品を見てどう感じたのか、どう思ったのかってことを、まずははっきり見極めない」と

姉貴は、らしくもなく真面目なことを言い出した。

「おかしくて笑っちゃうにせよ、逆に悲しくて泣いてしまうにせよ、自分がどう思うのかが大事でしょ。それがわからないんじゃ、自分

がどこにいるのかもわからないわよ。そして更に自分の立ち居地をはつきりさせて、自分の考えつてものを確立させて行く。そこが大事なんじゃないのかな」

明日は雨でも降るのかなあ。姉貴が喋っているのを眺めながら、俺はそんなことを考えていた。

「まあ、更に付け加えさせてもらうと、一言だけ『つまらない』だの『泣きました』なので、終わらせてしまつのも良くないと思うのよね。せめてどうしてそう思ったのかぐらい、自分でちゃんと説明できなくちゃ。少なくとも、私自身は、自分で自分の感情や考えを、説明できるようにしておきたいの」

まゝ確かに、映画とかの話をしていて「つまらない」や「泣きました」だけで終わられると、そこから先の話が続かないんだよなあ。「なんか、らしくもなく真面目な長話しちゃったわ」

なんだ、自覚はあったのか。

「いえ……色々、ありがとうございました」

巡音さんは真面目な表情でお礼を言っている。姉貴は嬉しそうだ。……なんだろう。

……なんだか、面白くない。

「あの……もう一つ、いいですか？」

巡音さんはそう言つて、鞆からDVDを一枚取り出した。

「もしよかったら、これを見てもらいたいんですが……」

姉貴がDVDを受け取る。俺は身を乗り出して、姉貴の手元のDVDを見た。ドレスを着た女性がパッケージに映っている。

「……『タイス』ね。これもオペラ？」

「はい。このオペラの主人公のことを、どう思うのかが知りたくて……わたし、どうにもよくわからなくて」

なんで姉貴に訊くんだ？ 妙な意見を聞かせてもらえるサンプル扱いなのか？

「巡音さん、『タイス』って、どういう意味？」

話題が変わったので、俺は口を挟んだ。

「ヒロインの名前なの。このパッケージの女性がそう。彼女は遊女というか、高級娼婦というか、吉原の花魁みたいな人なのね。で、主人公はアタナエルという男性で、修道士。オペラの舞台は四世紀のエジプト」

さすがというか、巡音さんはすらすらとオペラの情報を喋った。

修道士と高級娼婦………という話だ、それ。

「変わった設定だな」

「でも結構面白そうじゃない。今見てもいい？」

姉貴はそんなことを言い出した。

「わたしは構いませんが……」

巡音さんがちらつとこつちを見た。

「俺もいいよ」

話の中身、気になるし。さすがの姉貴も昼間っから飲む趣味はな
いから、この前みたいなのは起きないだろう。

「じゃあ見ましょうか」

姉貴はそう言って、DVDをプレーヤーに入れた。オペラが始ま
る。今回は劇場の外観は出てこず、抽象的な映像が映って、それか
らメニュー画面になった。

オペラが始まると、砂漠の中（例によってセットが凝ってる）で、
黒ずくめの修道士たちが歌っている。そこに、主人公のアタナエル
とやらが帰って来て、ヒロインのタイスが都市を墮落させている
幾らなんでも、女一人で都市そのものが墮落するわけないと思っ
んだが　とか、怒りをぶちまける。態度のでかい奴だな。でもっ
て、この人は、タイスを改心させたいらしい。それは余計なお世話
のような気がするんだが。

主人公は思いつめすぎているのか、眠ると夢にタイスがでてくる。
主人公はそれを、「彼女を改心させよ」という、神の啓示だと受け
取る。大体その辺りまで見た時だった。突然、姉貴が笑い出した。

「あ、あの……？」

巡音さんがびっくりして姉貴を見た。そりゃ驚くよな。どう考え

ても今のは笑うシーンじゃないだろう。

「あ、ああ、ごめんごめん……気にしないで……」

言いながら姉貴は相変わらず笑っている。それで気にしないでって無理があるだろ。

「姉貴、何がそんなにおかしいわけ？」

「だって……この主人公、あまりにもわかりやすすぎるバカやってるんだもの。これが笑わずにいられますか」

訊いてみると、姉貴はそんなことを言った。確かに態度でかいけど、バカなのか、この主人公。

「バカって……」

姉貴、巡音さんがびっくりしてるよ。まあ、酔っ払ってクダ巻かれるよりは遥かにマシだけど……。

「バカって、どの辺が？」

俺は代わりに訊いてみることにした。宗教的盲信さをバカって思ってるのかもな。なんといっても俺の姉貴だし。姉貴はリモコンの一時停止ボタンを押して画面を止めると、説明を始める。

「いや〜だって、この主人公、アタナエルだっけ？ 要するにただ単にタイスのことが好きなのよ。タイスが墮落してるから救ってあげなければとか言ってるけど、結局のところ、彼女が自分以外の不特定多数の男と寝てるのが気に入らないってだけ。なのに、自分が身体売ってる女に恋をしてるってことを認めたくないから『タイスを救うのが神の与えた我が使命！』だなんて、必死こいて言い訳作って、そうやって自分の体面を保ってるの。いや〜、本当、笑えるわ〜」

そこまで話すと姉貴は笑い崩れた。容赦なくバツサリやったなあ。巡音さん、シヨック受けてないといいけど。

「周りの態度を見る限り、結構ランクが上の人みたいなんだけど、だから余計認められないんでしょうね。この立派な俺様が、あんな穢れた女になんか！ って感じで。援助交際やりまくってる女の子に恋をした優等生みたいなものって言ったら、わかりやすいかしら

「？」

「うーん、わかるようなわからんような……。」

「大体、たった一人の女のせいで、都市全体が墮落するわけないでしょ。この男はそういう理屈でも作らないと、自分を騙せないのよでも、そうやって自分に嘘ついてごまかしたところで、どこかで限界来るわよ。まあ続きを見ましようか」

姉貴は余裕たっぷりにそう言うと、一時停止を解除した。オペラの続きが始まる。

主人公はアレクサンドリアに行き、貧乏くさい格好のせいで物乞いと間違われたりしながら　これは、作者流のギャグなんだろう　か　旧友のニシアスとかいう、遊び人っぽい男と再会する。この人は相当タイスに貢いでるらしく、タイスは現在彼の館に滞在中なんだそう。主人公は身なりがあまりにも汚いので、ニシアスの着替えを貸して貰い、宴の席でタイスと会って、改心せよと説き始める。冷静に考えると、かなりイタイ行為のような気がするぞ。タイスはまともに相手をしていないが、色々あって、場所を変えることになる。ここで、第一幕終了。ちなみに姉貴は、女性陣を見て「わゝ、衣装が素敵」と喜んでいた。一応アパレル業界にいるからなあ、姉貴。

第二幕では、舞台はタイスの館になっている。一人になった彼女は、今の生き方が空しいとか、年を取ったら自分は誰にも相手にされなくなるだろう、とか、そんなことを一人で歌っている。……なんか生々しいな。そこへアタナエルがやってきて、信仰による永遠の幸せを説くと、タイスは段々その気になってくる。えーっと……神経すり減らすような今の生活より、信仰による穏やかな生活を選ぶとか、そういうことなんだろう？　この辺りで、一度幕が下りてしばらく間奏曲のようなものが流れる。

「あれ、この曲って……？」

「どこかで聞いたことがあるような。」

「『タイスの瞑想曲』といって、これ単独で演奏されることのある

有名な曲なの」

へーえ。多分どこかで聞いたんだな。喫茶店とかのBGMにでも使われていたんだろう。ヴァイオリンの響きが特徴的な曲だ。この瞑想曲とやらの後で、タイスは唐突に改心を決意する。極端から極端に走ってるような気もするが……。アタナエルはタイスに不浄にまみれた身を浄化する為に、全財産を焼き捨てるかと命令する。本当に態度でかいな、こいつ。大体勿体無いだろ、それ。売ってお金に変えてどこかに寄付でもした方がいいんじゃないか？

タイスはそれを承諾するが、これだけは誰かにあげられないか、と小さな象牙の像を見せる。なんでも以前、ニシアスから貰ったらしい。瞬間「ニシアスからの贈り物だど！？」壊せ今すぐ！」と騒ぎ出すアタナエル。あっちゃ〜。姉貴の言うとおりだったよ。

姉貴を見ると、盛大に爆笑していた。

「ね？ 言ったとおりでしょ？」

「これは……確かにヤキモチ以外の何物でもないな」

しかし、十代ぐらいでこれをやるならまだわかんなくもないけど、この人かなりいい年だよな？ 色んな意味でイタいぞ。

「相手が自分の友達だから、なおさら許せないんでしょうねえ。でも、それを自分で自覚してない辺り、始末が悪いのよね……ああ、おかしい……」

確かになあ。宗教という言葉でくるんでしまっている分、余計厄介な気がする。

「あの……そうなんですか？」

巡音さんが姉貴に訊いている。姉貴は即答した。

「ニシアスからのプレゼントだって聞くやいなや、即激怒する辺り間違いないわ。それまで割と落ち着いて聞いていたのに、急にぶっつんしたでしょ。どう見てもこれは嫉妬ね」

巡音さんはまだよくわかっていないみたいで、首を捻っている。

オペラはまだ続く。ニシアスが、博打で儲けたから一遊びしようぜ〜とか言っつて、人を大勢連れてやってくる。タイスが改宗したこ

とを知らされて、騒ぎ出すその他大勢。下手すりゃ暴動が起きて二人とも殺されかねない大ピンチだったが、ニシアスが金貨をばら撒いて二人を助けてやる。……いい奴じゃないか、ニシアスって。こんなにひどく嫉妬されてるのに、こいつを助けるのか。第二幕はここで終わる。

第三幕では、アタナエルとタイスは砂漠を渡って旅をしている。ハードな旅に音をあげるタイスに、アタナエルは厳しい。このおっさん、もしかしてサディストの気でもあるんだろうか。結局タイスは倒れてしまい、アタナエルは慌てて介抱に走る。最初からそうしてやれよ。ここでちよつといい雰囲気になる。が、結局タイスは尼僧院に入って行き、アタナエルは淋しげに彼女を見送る。……例によつて姉貴はくすくす笑っている。内心でバーカバーカとでも思っているんだろう。

最初の砂漠に戻ってきたアタナエルだが、相変わらず夢にタイスが出てきて眠れない。……これが、姉貴が言っていた「限界」って奴か？ 相手が神様じゃ嫉妬するわけにもいかないもんな。姉貴は「遅いって！」と突っ込みを入れている。とかなんとかやっているうちに、タイスが死にかけていると知らせ 何があつたんだ、いたい が入って、アタナエルはタイスの許に駆けつける。

結局、二人はすれ違ったまま 何せ、アタナエルがようやく自分の気持ちを認めて「お前を愛している！」とか叫べるようになってたのに、タイスは「あなたのおかげで天国に行けるわ、ありがとう」としか言わないから タイスは死んで、オペラは終わる。うーん、なんというか……。最初から最後まで派手に主役二人がすれ違って終わったよ。すんごい皮肉に溢れたシナリオ。『ラ・ボエーム』とはえらい違いだ。誰だよこの話書いたの。

「ああ、おかしかった……オペラがこんなに面白いとは思わなかったわ」

結局、姉貴は最後まで笑っていた。……えーと、いいのかその反応。巡音さんが困ってるよ。多分これ、一般的には「悲劇」に分類

されるんだろうし。

「姉貴、今回は主人公がバカ入ってる割に怒らなかつたね」

反応としてはこっちの方が楽だけど、相手するのに。

「ん、ここまで道化に徹されると、笑えて来ちゃって怒るところじゃなくなるわね。かなり主人公を突き放した作りになってる辺り、作った人もわかってやってるんじゃない？ それにしても救いよりのない主人公だわ。傲慢と嫉妬のあわせ技抱えてる人が、神の道を説くんだから。まず自分を振り返りなさいって」

まーだ笑ってるよ。そんなにウケたのか。でもってあいかわらず容赦ない。けどなあ……。

「俺は、その辺りが皮肉だと思うんだよね。だってこの主人公、自分に嘘ついて誤魔化しまくっているのに、そんな奴の行動が、ある意味ではタイスを救ってしまうんだから」

途中の「壊せ今すぐ！」で、嫉妬のくだりは実にはつきりしてる。自分を騙すためにやったことが、結果的に彼女を自分の入れない世界に向かわせてしまうというのは、皮肉以外の何物でもないだろう。

「タイスは……幸せだったのかな」

巡音さんは、ぽつんとそう言った。……巡音さんはアタナエルよりも、タイスの方に思うところがあるらしい。

「俺は宗教の話はよくわかんないけど、幸せではあつたんじゃないかな？」

本人が満足なら、それでいいんじゃないだろうか。

「自分の心に素直に向き合った分、アタナエルよりは幸せな結末と言えるんじゃない？ 死ぬまでの日々は穏やかだったんじゃないのかな」

と、姉貴。巡音さんはしばらく考え込んでいたが、やがて姉貴に向かつて「あの……ありがとうございます」と頭を下げた。えーと……。

「そんなかしこまらなくていいわよ。かなり言いたい放題だったしかなり？ 無茶苦茶の間違いじゃないのか？」

「面白い作品見せてくれて、こっちこそありがとう」

結局そういう感覚なんだな。

「『ラ・ボエーム』と『タイス』だったら、どっちが好きですか？」
「当然『タイス』ね」

即答してるよ。まあ、姉貴の好みからいったら『タイス』だろうなあ。ひねくれた話好きだから。でも、こんなこと言ったらほぼ確実に「レン、あんた人のこと言えるの？」って、返ってくるな。やめとこうつと。

巡音さん、なんか嬉しそうだな。……俺はちよつと複雑だ。

「あの……お話するのは楽しいんですけど、わたし、そろそろ帰らないと……」

巡音さんは時計を見た後で、申し訳なさそうにそう言い出した。あ、結構遅い時間になっている。確か門限あるとか言ってたよな。

「そう？　じゃあ、気をつけてね」

姉貴はプレーヤーからDVDを取り出してケースに入れると、巡音さんに手渡した。巡音さんはDVDケースやお弁当箱を鞆に仕舞うと、もう一度丁寧に頭を下げた。

「それでは、失礼します。今日はありがとうございました」

「駅まで送ってくよ」

俺はそう言っただけで立ち上がった。一人じゃ駅まで行けないだろう。

「……ありがとう」

俺たちは連れ立って外に出た。姉貴が玄関口まで見送りに来た。

悲劇か喜劇か（後書き）

作中で上手に補足できなかったのでここに書きますが、『タイス』の原作者はアナトール・フランスという人で、ノーベル文学賞の受賞者だったりします。

ちなみに、オペラは原作に比べるとややマイルドな仕上がりになっています。原作はもっとと皮肉で、主人公（原作ではパニフィスという名前ですが）に対してもっと突き放した、容赦のない描写がされています。まあ……バカにしか見えない側面もあつたりしますが……。どう受け止めるかは読む人次第ですね。

トゥルー・カライズ

駅までへの帰りの道。巡音さんは来た時よりは落ち着いた様子だった。行きはがちがちに緊張していたもんなあ。何にせよ、打ち解けてくれるのはやっぱり嬉しい。

「姉貴の言うことは、あんまり真に受けない方がいいと思うんだよね」

歩きながら、俺は巡音さんにそう言った。

「どうして？」

「ん〜、滅茶苦茶言う人だし、思ったこと全部言わないと気が済まないようなところあるし、言い回しに容赦が無いし……巡音さん、びっくりしたんじゃない？」

巡音さんは歩きながら、軽く首を傾げた。髪と髪につけたリボンがあわせて揺れる。

「驚きはしたけれど……鏡音君のお姉さんは、嫌いになったら、はつきり『嫌い』って、言ってくれそう」

「まあ、そりゃなあ……」

巡音さんがどうしてそんなことを思ったのかはよくわからんが、姉貴はあんまりお世辞を言わない。まあ、あれで社会人だから、多少の建前は使ってるだろうけど。というか、使えないとまずいだろう。あ、駅に着いちゃったよ。巡音さんは帰りの切符を買って、こっちを向いた。

「送ってくれて、ありがとう」

なんか照れるな。

「これくらい大したことじゃないから」

「送ってくれたことだけじゃなくて……今日のこと全部、本当にありがとう。とても楽しかった」

巡音さんはそう言って、にっこりと笑った。あ……。

……巡音さんが笑ったとこ、初めて見た。今まで、表情が和らい

だり嬉しそうにしていたりすることは 回数には少ないけど あつたけど、こつこつという、満面の笑顔というのは初めて見る。俺はついまじまじと、巡音さんの顔を見てしまった。向こうがこつこつちの視線に気づいて、怪訝そうな表情になる。

「……鏡音君、どうかした？」

「あ、いや……なんでも」

元に戻っちゃったか。残念だ。……もつと見ていたかったのに。

「それじゃあ、わたしはこれで。また明日、学校で」

「ああ、気をつけてね」

巡音さんは大きく手を振ると、改札を抜けて駅のホームへと去って行った。なんで……淋しく思うんだろ。帰るのなんて当たり前なのに。

「ただいま」

「あ、お帰り。ちゃんと駅まで送ってた？」

「当たり前だろ」

帰宅すると、姉貴は居間で何かを見ながら難しい顔をしていた。

……どうしたんだ、一体。俺は姉貴が見ているものを覗き込んだ。

「……アルバム？」

姉貴が見ていたのは、自分のアルバムだった。制服姿の姉貴が映っている。あ……てことは、もしかして。

「姉貴、これって」

「これ見て」

俺の言いたいことを察したのか、姉貴は俺が言う前に、写真の一枚を指差した。ユニフォーム姿でラケットを抱えた姉貴の隣に、同じユニフォームを着た、髪の毛の長い大人しそうな女の子が立っている。

「この人が、巡音さんのお姉さん？」

「そう、ハクちゃん。私が三年の時に一年だったの」

姉貴は俺より六つ上だから、巡音さんとは四歳違いか。……それ

にしても。

「あんまり似てないね」

大人しそうなところは共通してるけれど、顔立ちは全然似ていない。

「兄弟だから似るってもんでもないしねえ。私とあんたも全然似てないし」

と、姉貴。まあ確かに俺らははっきりきっぱり似ていない。

「そりゃあ、俺は母親似で姉貴は父親似だし。じゃ、巡音さんともそうなのかな」

「うーん、どうかしらね……お母さんの方しか知らないし。リンちゃんにちよつと似てたような気がするけど」

ふーん。……って、あれ。

「会ったことあるの？」

「一度だけね。試合の応援に来てたの。リンちゃんも一緒だったわ」

「え、じゃあ、姉貴は巡音さんとは今日が初対面じゃないんだ。それ言わなかったね」

向こうも気づいてないみたいだったけど。

「あのねえ、会ったといつても、五年も前にたったの一度、それもごく短い時間よ。それにリンちゃんは、あの時まだ小学生だったのよ。私のことなんて、憶えてるわけないでしょ」

姉貴が高三だと、俺は小六か。確かにそれで憶えてるっていうのは無理があるな。

「それはそれとして、何だって姉貴、アルバム引っ張り出してため息ついてんの？」

「社会に出て働くようになるよね、この時代をしみじみ懐かしく思うようになるものなのよ。ああこの頃は良かったなって……。あんた、今ちよつどその最中なんだから、今のうちにしっかりと楽しんできなさいよ」

姉貴はそんなことを言い出した。……はっきり言おう、似合っていない。

「そんなもんなの？」

「そういうものよ。最中だと、わからないものだけだね」

相変わらずしみじみそんなことを言う姉貴。……本当にそれだけか？ どうもそれだけじゃないような気がするんだが……。とはいえ、詮索しても答えてくれそうにないなあ。他のこと訊くか。

「巡音さんのお姉さんってどんな人だったの？」

「ハクちゃん？ ん、大人しいけど、根気のある子だったわね。バドミントンって軽く見えても本格的にやるとハードだから、軽い気持ちで入って音を上げて辞めてく子って多いんだけど、ハクちゃんも頑張って続けてたし」

やっぱり大人しいタイプなのか。

「でもリンちゃんとは少し感じが違うかな？ ハクちゃんはなんていうか、ちょっとピリピリしたところがあつたのよね。とはいえ、綺麗な子だったから、共学だったら男の子からモテたかもしれないけどねえ」

姉貴の卒業した高校は女子高だ。高校時代、バレンタインデーにはチョコレートをも抱えて帰って来たのを憶えている。なんで女同士であげたがるのか、俺にはよくわからないけど。巡音さんのお姉さんからも貰ったのかなあ。

「バレンタインデーにはチョコレート貰ったりした？」

「貰ったわね。ま、部活の子のほとんどがくれたんだけど」

あ、やっぱり。姉貴は引退後もちよくちよく部活に顔だして、後輩の面倒見ていたからなあ。受験しなかったから暇もあつたし。

「リンちゃんは、学校ではどんな感じ？」

「真面目で大人しくてよく勉強してる。趣味は読書と音楽鑑賞だった前に聞いた。人と話すのが苦手」

今日はよく喋ってくれたけど。ちょっとは慣れてきたのかな。

「なんか本当にいいところのお嬢さんって感じね……ところで」

姉貴は不意に真面目な顔で、俺の方を見た。……なんだよ。

「何？」

「リンちゃんのことをどう思う?」

どうしてそういうことを訊きたがるんだよ……。訊かれるだろうとは思ってたけど。

「どうって……友達だよ」

「本当にただの友達?」

しつこいなあ。どうしてこの手の詮索が好きなんだ。

「なんでそんなこと訊くわけ?」

「リンちゃんとは中途半端なつきあいをしてほしくないから」

だ〜から〜、そういう関係じゃないって言ってるのに。わかんない姉貴だな。

「別につきあつてないってば」

「でも、友達でしょ?」

「そりゃあ」

友達なのは確かなので、俺は頷いた。

「友達づきあいもつきあいのうちよ。リンちゃんみたいな子は色々難しいの。中途半端に構うのだけはやめてちょうだい」

……なんだよそれ。俺には姉貴の言うことがさっぱりわからなかった。大体、なんで俺がそんなこと、言われなくちゃならないんだ。「なんだよ。姉貴、俺がユイとつきあつてた頃はそんなこと言わなかっただろ」

節度のある年齢相応のつきあいにしておけ、とは言われたし、それについてくどいぐらいの説明も受けたが、つきあいそのものは反対しなかった。なのになんで友達である巡音さんに対して、こんなことを言ってくるんだ?

「ユイちゃんはリンちゃんとは違うから。それに、ユイちゃんとは全く接点がないけれど、リンちゃんはハクちゃんの妹だから間接的とはいえ、関わりがあるしね。傷つくの黙って見てるわけにはいかないのよ」

「俺が巡音さんを傷つけると思ってるわけ!?!」

そんなことするもんか。やっとまともに話せるようになってきた

のに。

「あんたにその気がなくても、軽い気持ちで構っていたら、いつかはそういうことになるの。あんたも傷つくし、リンちゃんも傷つく。その場合、リンちゃんの方が傷が深くなるの」

いらついできたぞ。今は姉貴が俺の保護者かもしれないが、こんなことを言われる筋合いはない。

「俺の交友関係に口出さないでくれよ！」

「あんたにさっきのオペラの主人公みたいになってほしくないのよ」
むかつ。何だよその言い草は。

「それこそ余計なお世話だろ！　というか、あのバカと俺を一緒にしないでくれよ！　ああなるわけないだろ！」

完全に頭に来た俺は、そう叫ぶと部屋を出て行った。これ以上姉貴の相手なんかしてられるか。何なんだよ、全くもう。

トウルー・カライズ（後書き）

レンが出てっっちゃった後のめーちゃんの独り言。

「うーん、例えがまずかったかしら……」

いやそついう問題じゃないですが。とにかく完全に誤解されました、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5419v/>

アナザー：ロミオとシンデレラ

2011年9月26日21時56分発行